

翻訳：ウェイクフィールドのスミス『国富論』註解¹(3)

E. G. ウェイクフィールド著
諸泉俊介² 訳

Translation: Wakefield's Notes to his edition of *Wealth of Nations* (3)

by E. G. Wakefield
translated by MOROIZUMI Shunsuke

要 旨

E.G. ウェイクフィールド (Edward Gibbon Wakefield : 1796-1862) は、1834年に主著『イングランドとアメリカ』³を公刊した翌年の1835年、自ら編集したアダム・スミス『国富論』を出版した。このウェイクフィールド編集の『国富論』には、第1編と第2編とに、原則として各章の後にかなり長い註解 (Note) がつけられている。第1編では第1章から第11章までのすべての章に註解がつけられているが、第5、6、7章の註解は第7章の後にまとめておかれている。第2編についても第1章から第5章までの総ての章に註解が付されているが、第1章と第3章の註解は第3章の後にまとめておかれている。第3編および第4編については、註解は付されていない。ウェイクフィールドの『国富論』註解については、J.S. ミルが『経済学原理』のなかで、またK. マルクスが『資本論』や『剰余価値学説史』のなかで引用しているが、近年ではD. ウィンチが『古典派政治経済学と植民地』⁴においてしばしば言及している。本訳稿はこれらの註解のうち、第1編第10章および11章への註解の翻訳である。

目次

序章 本版への序文

第1章 第1編第1章への註解
(以上、第10集第1号)

第2章 第1編第2章への註解

第3章 第1編第3章への註解

第4章 第1編第4章への註解

第5章 第1編第5章、第6章、第7章への註解

第6章 第1編第8章、第9章への註解
(以上、第10集第2号)

第7章 第1編第10章への註解

第8章 第1編第11章への註解
(以上、本号)

第7章 第1編第10章〔労働と資本のさまざまな用途における賃銀と利潤について〕への註解

本章は、『国富論』のなかでも最も大きな賞賛

¹ 原典については、「翻訳：ウェイクフィールドのスミス『国富論』註解(1)」(『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第10集第1号、2005年9月)の註1を参照のこと。なお、本文中、ウェイクフィールドが註解に付した註は*をつけてパラグラフの後に置き、訳者がつけた訳注は、1、2、3の数字をつけて脚注においた。

² 佐賀大学文化教育学部

³ Wakefield, E.G., *England and America: A comparison of the social and political state of both nations*, Harper and Brothers, 1834, rep. by A. M. Kelley, 1967. 邦訳『イギリスとアメリカ：資本主義と近代植民地』全三分冊、日本評論社(世界古典文庫)、1947-48年。

⁴ Winch, D., *Classical Political Economy and Colonies*, Bell and Sons, 1965. 邦訳『古典派政治経済学と植民地』未来社、1975年。

が与えられている見事な章の一つであり、どのような面から見ても誤りなどはなく、今日でもなお、本章が関わる問題についての完璧な説明だけを含んでいると認められている。しかしながら本章には、もう一つ別の全般的な留意点がほのめかされてもいる。

独占に起因するとされる賃銀と利潤とへの影響が悪しきものであるのは、ただ、それがすべてにまねく及ぼされないからだけであった。つまりこうした影響はまさに、あらゆる仕事に及ぼされればよいと望まれるはずのものである。都市における高い賃金率と高い利潤率とは、都市の労働者と資本家とが増大するのを妨げることによって維持された。このことは、はなはだ慈悲深くまた高名な経済学者たちが、現在、都市と農村との双方の勤労者に示している提案である。こうした経済学者の多くが、あらゆる階層の労働者に高い賃銀を維持させようとするならば、労働者全体に過剰な人口を抑制させねばならないと述べている。チャーメーズ博士は名声の点でもあるいは勤労者への同情心でも人後に落ちない人物であるが、博士は慎重に、次のように付け加える。すなわち、すべての資本家に高い利潤を獲得させようとするのであれば、資本家全体に過剰な取り引きを抑制させねばならない。今日のグレート・ブリテンにおいて、後者の抑制が前者と同じほどに要求されていることは明らかである。そしてこの提案全体は理にかなっているように思えるだけでなく、労働者の窮乏と資本家の苦境とから逃れる道を指摘している唯一の提案でもある。すなわち、資本と労働との充用分野を人口や資本と同じほど急速に増加させる方策など存在しないということを前提にすれば、これこそが唯一の提案なのである。

第 8 章 第 1 編第 11 章 [地代について] への註解

地代の問題を取り扱っているまことに長大なこ

の章の各部分は、普通、本書の中では最も不完全かつ誤った箇所であると考えられている。この章の研究には興味をそそる詳細な歴史が溢れており、その素晴らしい例証や、それに付随してなされたはなはだ意義深い考察の中には恐らく今なお発芽せぬままの真理の芽が含まれているであろうが、しかしそこには地代の性格や原因に関する歴然とした足跡はなにも一つ印されていない。ベンサム『報償の論理』の編者⁵がアダム・スミスの著作全般について語ったことは、本章にはことさらよく当てはまるように思われる。すなわちスミスは、「すべてのことを一つの原理に帰することによって問題を単純化」しようとはしなかったが、「この原理は、彼のすべての推論を極めて小さな円環にもたらしはざるものであり、ばらばらのままではそれほど簡単に掴むことのできない知識を一つの束にまとめ上げることに役立つはずのものであった。スミスがこのような原理を明瞭に認識したとすれば、彼はそれを自らの体系の中心に据えたはずであり、この原理は、彼が自らの体系をその上に築くための礎石となっただろうし、そして繰り返し巻き返し述べるようなことをせずにすんだに違いない」。スミスの打ち出す概念が正確であることはめったになく、こうした概念は、時として曖昧であるだけでなく矛盾してもいる。スミスは、ある時には、地代が存在するのは「いったんある国の土地がすべて私有財産になってしまうと、地主は、他のすべての人々と同じように、自分が種を播きもしなかったところで収穫することを好み、土地の自然の生産物にたいしてさえ地代を要求する」ためであり*、すなわち簡単にいえば、地代は支払われるべきだと土地所有者たちが決めるから地代が存在する、と空想しているかのように思われる。しかしスミスは、別の時には、地代は土地の使用にたいして借地人が現実の状況下で支払いうる最高の額であり、したがって地代の額は地主の希望によって定まるものでは決してないと明言してもいる。スミスは、あ

⁵ この『報償の理論』(Rationale of Reward)の編者とはリチャード・スミスのこと。スミスは、1825年、デュモン編の『刑罰と報償の理論』の中に入っていた報償の理論部分を英語に訳して(ベンサムの英語はそのまま用いている)出版した。

る場所では、地代が増加するので価格が上昇すると考えているが、他の場所では、価格が上昇するので地代が増加すると考えている。スミスは、地代を生み出す生産と地代を生み出さない生産との間に異なる種類の生産についての区別を設け、また、同じ種類の生産であっても地代を生み出すことになる事情と生み出すことのない事情との間に異なる事情についての区別を設けるが、こうした区別は、きわめて広い意味では真理であることに恐らく賛同しようとしても、それでもなお、道標べとなる何らかの原理と関連づけられていないので、事実と道理とに基づいた真理というよりもむしろ、技巧をひけらかすために設定された区別という様相を呈している。すこぶる豊かな材料であっても、こうした材料を整理し結びつけるための誘導原理を欠いているために、それらはほとんど無駄なものである。

*第1巻134頁を参照のこと⁶。

したがって、これ以降の研究者たちは、あらゆる諸現象を単一の原理に関連づけることによって、アダム・スミスの著作のこの大きな欠陥を埋め合わせる努力を注いできた。地代の性格とは果たして何であろうか。地代が増加したり減少したりする原因は果たして何であろうか。こうしたことが解決すべき問題であった。こうした問題に対する同じ回答が、お互いに連絡を取り合ったわけではない三人の人物から同時に寄せられた。こうした人物とは、エドワード・ウエスト卿、マルサス氏、そしてリカードウ氏であり、彼らは発見者としての名声を博してきた。

この註解では、「リカードウの地代理論」と普通には呼ばれているものにかかなり大きく注目して

いるが、それは、この理論が政治経済の科学に近年加えられた最も重要な追加点だと考えられるからであり、同時にそれが、アダム・スミスの地代研究がもっている豊富ではあるが混乱した論述を活かしうる手段を備えているからである。そこで私は、ここではリカードウ氏に最初の発言者の席を与え、次の席をリカードウ氏の高名な弟子であるミル氏に与えて、彼らに彼らの言葉をもって語らせることにしよう。

「地代について」

*D.リカードウ『経済学と課税の原理』第3版より。
この叙述は原典からとっている⁷。

「しかしながら、土地の占有とその結果である地代の創造とが、生産に必要な労働の分量とは無関係に、諸商品の相対価値に何らかの変動を引き起こすかどうか、ということ考察する仕事が残っている。問題のこの分野を理解するために、私たちは、地代の性質と、その上昇または低下を左右する法則を研究しなければならない。

「地代は、大地の生産物のうち、土壌の本源的で不減な力の使用に対して地主に支払われる部分である。しかしながらこの用語は、しばしば資本の利子や利潤と混同されており、通俗的な言葉では、農業者によって彼の地主に支払われるすべてのものに適用されている。同じ面積で同じ自然の肥沃度をもった二つの隣接農場のうち、もしも、一方は農耕用建物に関してあらゆる利便をもった上に、適切に排水と施肥とが行われ、また生垣や柵や塀によって都合よく区分されているのに、他方のものはこれらの便益を一切もっていないとすれば、当然のことながら、一方の使用に対しては

⁶ 註解の前部には『国富論』の原文がついているが、便宜的にグラスゴー版『国富論』の当該箇所を註記する。An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, in The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, vol. II, III, Oxford University Press, 1976, p.67. 邦訳『国富論』(杉山忠平訳、水田洋監訳、岩波文庫、2000-1年)第1分冊95頁。以下ではW.N.と略記し、原著のページと訳書の分冊巻数および頁を記す。

⁷ これ以下の部分は、リカードウ『経済学および課税の原理』第3版の第2章「地代について」が、註を除き、すべてそのまま引用されている。Ricardo, D., On the Principles of Political Economy, and Taxation, 3rd ed., 1821, in The Works and Correspondence of David Ricardo, vol. I, 1953, pp.67-83. 邦訳『経済学および課税の原理』『デイヴィッド・リカードウ全集』第1巻、雄松堂書店、1972年、79-98頁。以下では、Ricardo, Principles と略す。

他方の使用に対するよりも多くの報酬が支払われるであろうし、しかもこの両方の場合ともこの報酬は地代と呼ばれるであろう。しかし、土壌の本源的で不滅の力に対して与えられるべきものは、改良された農地に対して年々支払われる貨幣の一部のみであるに違なく、他の部分は、地質を改善するためと、生産物を確保しかつ保存するために必要な建物を建設するために充用された資本の使用に対して支払われるものであることは明白である。アダム・スミスは、時として、私が限定したいと思っている厳密な意味において地代を論じているが、しかし彼は、ずっと頻繁に、この用語が通常使用されている通俗的な意味においても論じている。スミスは、ヨーロッパの南部諸国における木材需要とその結果としての高価格とは、以前には地代を一切生み出さなかったノルウェイの森林に地代を支払わせる原因となった、と述べる。しかしながら、このようにスミスが地代と呼ぶものを支払った者は、その時その森林に生えていたのが有価の商品であることを考慮し、実際にはその木材を売却することによって利益とともにそれを回収したことは明らかではないだろうか。なるほど、木材が伐採された後に、もしも、将来の需要を見込んで木材や何か別の生産物を栽培することを目的として、土地の使用に対して地主に何らかの報償が支払われるとすれば、そのような報償は土地の生産力に対して支払われるものであろうから、地代と呼ばれるのが正当であろう。とはいえアダム・スミスが述べた場合には、報償は木材を伐採して売却することの自由に対して支払われたのであって、木材を栽培することの自由に対して支払われたのではない。スミスはまた、炭鉱および採石場の地代についても論じているが、これについても同じ考え方が当てはまる。すなわち、炭鉱および採石場に対して与えられる報償は、そこから採取しうる石炭または石材の価値に対して支払われるのであって、土地の本源的で不滅な力とは何の関連もないのである。これは、地代および利潤に関する研究の上では、大変に重要な区別である。というのは、地代の増進を左右す

る法則は、利潤の増進を左右する法則とは大いに異なっていて、同一方向に作用することはめったにない、ということが確認されるからである。あらゆる進歩した国においては、地主に年々支払われるものは地代と利潤との二つの性質を兼ね備えているから、時には、反対に作用する諸原因によって変動しないままであることがあり、また別の時には、これらの諸原因の一方もしくは他方が優勢となるに応じて増進したり減退したりする。そこで、本書の以下の部分において私が土地の地代について論ずる場合には、私はつねに、その本源的で不滅な力の使用に対して土地の所有者に支払われる報償について論じているものと理解してもらいたい。

「豊饒で肥沃な土地が豊富に存在し、現状の人民を扶養するためにはそうした土地のほんの僅かな部分を耕作する必要があるに過ぎず、あるいは実際にその人民が自由にしうる資本をもって耕作することのできるのはこうしたほんの僅かな部分であるに過ぎないような国に最初に定住する際には、地代は存在しないだろう。というのは、豊富な分量の土地がいまだ占有されておらず、従ってそれを耕作しようと思った者ならば誰でも自由に使用できる場合には、土地の使用に対して支払う者など一人もいないに違いないからである。

「このような土地に対しては、ありふれた供給と需要との原理に基づいて、どのような地代も支払われえないであろう。それは、空気や水の使用に対しては、すなわちどのようなものであれ無限の量で存在する自然の賜物の使用に対しては、なぜ何も与えられないのかということ述べた同じ理由による。蒸気機関は、一定量の燃料を用い、大気の圧力と蒸気の伸縮性との助けを借りて作業を遂行し、人間労働を甚だしい程度で短縮しうる。しかし、こうした自然の援助は無尽蔵であり、誰しものが自由に利用しうるために、その使用に対してはびた一文の料金も請求されない。同じように、醸造業者や蒸留業者や染色業者は商品を生産するために空気や水を普段に使用しているが、しかし空気や水の供給は無限であるから、それらは

価格を一切もたない。もしもすべての土地が同じ特性をもち、その分量に制限がなく、また地質が均一であるとするならば、その土地が位置についての特殊な利点をもっていない限り、その使用に対しては何らの料金も請求しえないに違いない。そうしてみると、土地の使用に対して地代が常に支払われるのは、その土地の分量が無制限でなく地質が均一ではないからであり、また人口の増加につれて、劣等の土地あるいは位置の利点がより小さい土地が耕作されるようになるからに他ならない。社会の進歩につれて第二等の肥沃度をもった土地が耕作されるようになるとき、地代は直ちに第一等の地質の土地に発生し、そしてその地代の額は、これら二つの土地部分の地質の差に依存するだろう。

「第三等の地質の土地が耕作されるようになると、地代は直ちに第二等の土地に発生し、そしてその地代は、前の例のように、これらの土地の生産力における差によって左右される。同時に第一等の地代は上昇するであろう。というのは、第一等の地代は常に、一定量の資本と労働とを用いてこれらの土地が産出する生産物の差額だけ、第二等の地代を上回らねばならないからである。一国が食糧供給の増加を可能にするためには、その国は、人口が増加するたびごとにより劣等の土地に頼ることを余儀なくされるが、それに応じて、それより肥沃なすべての土地で、地代は上昇するだろう。

「このようにして、第一等、第二等、第三等の土地は、等しい分量の資本と労働とを用いて、100クォーター、90クォーター、80クォーターの穀物を、純生産物として産出するものと仮定しよう。人口に比べて肥沃な土地が豊富に存在し、従って第一等地を耕作することしか必要ではない新しい国においては、この純生産物はすべて耕作者に帰属し、彼が前払いする資財の利潤となるだろう。人口が、労働者を扶養した後に僅かに90クォーターしか取得できない第二等の耕作を必要とするほどに増加するやいなや、第一等地には地代が発生するはずである。というのは、農業資本に対

して二つの利潤率が存在せねばならないか、さもなければ、10クォーターまたは10クォーターの価値が、ある他の目的のために、第一等地の生産物から引き去られなければならないからである。この第一等地をその土地の所有者が耕作しようが、別の誰かが耕作しようが、この10クォーターは等しく地代を構成するだろう。というのは、第二等地の耕作者は、地代として10クォーターを支払って第一等地を耕作しようが、地代を一切支払わないで引き続き第二等地を耕作しようが、自らの資本を用いて同じ結果を得るに違いないからである。同様にして第三等地が耕作されるようになると、第二等の地代は10クォーターまたは10クォーターの価値でなければならず、それに対して第一等の地代は20クォーターに上昇する、ということを示しうるだろう。というのは、第三等の耕作者は、第一等の地代として20クォーターを支払おうと、第二等の地代として10クォーターを支払おうと、あるいは地代を一切支払わないで第三等地を耕作しようと、同一の利潤を得るに違いないからである。

「第二等地、第三等地、第四等地、第五等地、あるいはもっと劣等の土地を耕作するに先だって、既に耕作されている土地に資本をもっと生産的に充用することが可能であるということは、たしかにしばしば起こることであり、いや実際は普通に起こることである。第一等地に充用された最初の資本を二倍にすることによっては、生産物は二倍にはならないとしても、すなわち100クォーター増加することはないにしても、85クォーターは増加させうるであろうし、そしてこの分量は同一の資本を第三等地に充用することによって取得しうるはずのものを上回っている、ということが恐らくは見出されるであろう。

「このような場合には、資本は、恐らく古い土地に充用されて、同じように地代を生み出すであろう。というのは、地代は常に、二つの相等しい分量の資本によって取得される生産物の差額だからである。もしも借地農が、1,000ポンドの資本を充用して彼の土地から100クォーターの小麦を

収穫し、そして第二の1,000ポンドの資本を充用して85クォーターの追加の収穫をえるとすれば、二つの利潤率はありえないのであるから、彼の地主は借地期間の終了に際して、借地農に対して15クォーターあるいはそれに相当する価値の追加地代を支払うことを余儀なくする力をもっているに違いない。もしも借地農が、彼が充用した第二の1,000ポンドに対する収穫の中から15クォーターが減少することに甘んじるとすれば、それは、この資本に対するより有利な用途が見つからないからである。普通の利潤率はこの率に等しいはずであり、そこでもしも最初の借地農が、この利潤率を超えるすべてのものを、彼がこれを得た当の土地の所有者に与えることを拒むとしても、喜んでこれを与えようとする誰か別の者が現れるに違いない。

「この場合にも、他の場合と同じ様に、最後に充用された資本は一切地代を支払わない。第一の1,000ポンドの資本のより大きな生産力に対しては15クォーターが地代として支払われるが、第二の1,000ポンドの充用に対して地代はびた一文支払われない。もしも第三の1,000ポンドが同一の土地に充用されて75クォーターの収穫をえるならば、その場合には第二の資本に対して地代が支払われ、その額は、この二つの資本の生産物の差額、すなわち10クォーターに等しいであろうし、同時に、第一の1,000ポンドに対する地代は、15クォーターから25クォーターへと上昇し、これに対して最後の1,000ポンドは何らの地代も支払わないであろう。

「こうしてみると、もしも良質の土地が、増加する人口のために必要とされる食糧を生産するための量よりも豊富に存在するか、あるいは資本が収益の減少を伴うことなしに旧い土地に無制限に充用されるのであれば、地代が上昇するということはありえないはずである。というのは、地代は常に、比例して遞減してゆく収益を伴う追加労働量の充用から発生するものだからである。

「最初に耕作されるのは、最も肥沃で地理の上で最も有利な位置を占める土地であり、この土地

の生産物の交換価値は、他のあらゆる商品の交換価値と同様に、それを生産して市場にもたらすのに必要な、最初から終わりまで眺めれば様々な形態をとって現われる労働の総量によって調整されるであろう。地質の劣った土地が耕作されるようになる、原生産物の交換価値は、それを生産するのにより多くの労働が必要とされるために、騰貴するであろう。

「製造されたものであれ、鉱山からの採鉱物であれ、土地の生産物であれ、あらゆる商品の交換価値を左右するのは、それらを生産する上で極めて有利で特殊な便益をもっている人々が独占的に享受している事情の下でそうした商品を生産するのに十分であるような、より少量の労働によってではなく、このような便益をもたない人々が、つまりは最も不利な事情の下で引き続いてこうした商品を生産する人々がこうした商品の生産に必ず投下する、より多量の労働によってである。ここにいう最も不利な事情が意味しているのは、必要とされる生産物の量を引き続いて生産して行くためになくはならないような、最も不利な事情である。

「かくして、貧民が慈善家の基金によって仕事をさせられる慈善施設においても、このような仕事が生み出す諸商品の一般的価格が支配されるのは、そうした施設の労働者に与えられる特殊な便宜によってではなく、他のあらゆる製造業者が遭遇せねばならない、一般の、普通の、そして自然の困難であろう。もしもこうした恵まれた労働者によってもたらされる供給が社会のすべての欲望に応じるとすれば、こうした便宜を一切享受していない製造業者は、実際に、市場から完全に駆逐されるであろう。しかしもしもこの製造業者が仕事を続けるとすれば、そのことは、彼もその仕事から、資財の普通の一般的な利潤を引出すべきであるという条件の下においてのみ可能であるに違はなく、そしてこうしたことは、彼の商品がその生産に投下された労働量に比例する価格で売られる場合にもみ起こりうるはずである。

「最良の土地においては、同じ生産物が以前と

同じ労働をもって獲得されるに違いないが、しかしその生産物の価値が、肥沃度の劣った土地に新しく労働と資財とを充用した人々によって取得される収穫が逡減する結果、高められるに違いないということは真実である。そうしてみると、肥沃な土地が劣等な土地に勝る利点は決して失われるのではなく、ただ耕作者または消費者から地主へと移転されるにすぎない。そうであるにも拘わらず、なお、劣等な土地ではより多くの労働が必要とされ、しかも私たちは唯一このような土地からのみ原生産物の追加的な供給を得ることができるのであるから、こうした生産物の相対的な価値は永続的に以前よりも高い水準にあり続ける。そしてこうした生産物は、帽子、服地、短靴等の、その生産にこのような追加的な労働量を必要としない諸商品のより多くの量と交換されるであろう。

「そうだとすれば、原生産物の相対的な価値が騰貴する理由は、最後に取得された原生産物部分の生産により多くの労働が充用されるからであって、地代が地主に支払われるからではない。穀物の価値は、地代を一切支払わない地質の土地において、また地代を一切支払わない資本部分を用いて、生産に投下される労働量によって左右される。穀物は地代が支払われるから高いのではなく、穀物が高いから地代が支払われるのである。そして、たとえ地主が自分の地代をすべて放棄するにしても、穀物の価格の上にはどのような減価も起こらないはずだ、ということが正しく述べられてきた。このような方策によっては、ただ若干の農業者を紳士のように生活させることが可能となるだけであって、耕作されている最も生産力の小さな土地において原生産物を栽培するのに必要な労働量を減少させることにはならないに違いない。

「土地は地代の形で剰余を生み出すのだから、有用な生産物を生み出す源泉としては、他のあらゆるものに勝る長所をもっている、という言葉ほど月並みなものはない。しかし土地は、最も豊富な場合には、最も生産的な場合には、そして最も肥沃な場合には、びた一文の地代も生まず、そし

て、より肥沃な土地で最初の生産物の一部が地代として取り除けられるのは、土地の力が衰え、労働に対する報酬としてより少ないものしか生み出さない場合だけである。こうした土地の性格は、製造業者を支援する自然の作用に較べれば一つの欠点として注目されるべきであったが、それが却って、土地に固有の卓越性をなすものとして指摘されるべきであったというのは、いかにも奇妙なことである。もしも、空気や水や蒸気の伸縮性や大気の圧力といったものが様々な質を有するものであったとすれば、そして、もしもそれらが占有されるものであり、それぞれの質のものがそこその分量でしか存在しなかったとすれば、こうしたものも、土地と同様に、相次ぐ質のものが充用されてゆくにつれて、地代をもたらずに違いない。より劣等のもものが充用される度毎に、それらのものを用いて製造される商品の価値は、同じ量の労働が生産的でなくなるのであるから、騰貴するに違いない。人間が額に汗して多くのことをなし、自然はより少なくしか作用しないに違はなく、そして土地が、その限られた力のために卓越することも最早なくなるに違いない。

「土地が地代の形で与える剰余生産物がもしも一つの長所であるとするれば、年々新しく作られる機械は旧い機械よりも効率の上で劣っているのが望ましいことになる。というのは、効率の上で劣っていれば、この新しい機械によって生産された財貨だけでなく、この王国にある他のすべての機械によって生産された財貨には、疑いもなく、より大きな交換価値が与えられるに違いないからであり、そして最も生産的な機械をもっている者すべてに、地代が支払われるに違いないからである。

「地代の上昇は、常に、その国の増加しつつある富の結果であり、そして増加した人口のための食糧を賄うことの困難の結果である。地代の上昇は、富の徴候ではあるが、原因などでは決してない。というのは、富は、地代が静止している間に、あるいは低下している間ですら、しばしば最も速やかに増加するからである。地代は、利用しうる土地の生産力が減退するにつれて、最も速やかに

増加する。富は、利用しうる土地が最も肥沃であり、輸入の制限が最小であり、また農業上の改良によって相対的な労働量にどのような増加も伴うことなく生産を増大しうる国々、したがって地代の増進が緩慢な国々において、最も速やかに増加する。

「穀物の高価格が、もしも地代の結果であってその原因ではないとすれば、価格は地代の高低に比例した影響を受け、地代は価格を構成する一部分となるはずである。しかし、最大の労働量によって生産される穀物こそが、穀物価格の規制者なのであって、地代がその価格の一構成部分として加わることはほんの僅かな程度ですら決してなく、また加わることもできないのである。それゆえアダム・スミスが、諸商品の交換価値を規制した最初の法則が、つまり、諸商品を生産する相対的な労働量を規制したそもそもの法則が、土地の占有と地代の支払いとによってともかくも変更されると想定したことは、正当ではありえない。原材料はほとんどの商品の構成部分として加わるが、しかしその原材料の価値は、穀物と同様に、地代を支払わない最後の土地に充用された資本部分の生産力によって規制されるのであり、それゆえ地代は、諸商品の価格を構成する部分などではない。

「私たちはここまで、様々な生産力の土地をもった一つの国において、富と人口との自然の増進が地代に及ぼす影響を考察してきた。そして私たちは、生産性の低い収穫しかもたらさない追加の資本部分を土地に充用しなければならなくなる度毎に、地代が上昇するはずだということを見てきた。同じ原理から、土地に同じ額の資本を充用する必要がなくなるに違いない何らかの事情は、従って最後の資本部分をより生産的にするはずの何らかの事情は地代をより低くするだろう、ということが導かれる。ある国の資本に、労働を維持すべく予定されている基金を著しく減少させるほどの大幅な減少が起これば、当然こうした結果を生じるに違いない。人口は、これを雇用すべき基金によって規制され、それゆえ常に、資本の増減

と共に増減する。したがって、資本が減少する度毎に、必然的に、穀物に対する有効需要の減少、価格の下落、そして耕作の縮小が伴う。資本の蓄積が地代を引き上げるのとは逆の順序で、その減少は地代を引き下げるだろう。生産性の程度がそれほど小さくはないような地質の土地も次々と放棄されてゆき、生産物の交換価値は下落し、そして優れた地質の土地が最後に耕作される土地となり、その時には、それは地代を支払わない土地となるだろう。

「しかしながら、一国の富と人口とが増加する時にも、もしもこうした増加が農業上の著しい改善を伴うのであれば、同じような結果が生み出されうる。というのも、より痩せた土地を耕作する必要が少なくなるか、あるいはより肥えた土地部分の耕作に同じ額の資本を支出する必要が少なくなるという、同じような結果が得られるはずだからである。

「仮に、一定の人口を扶養するために100万クォーターの穀物が必要であり、その穀物は第一等、第二等、第三等の土地で産出されるとしよう。そしてもしも、後日、ある改良方法が発見され、この方法によって穀物は、第三等の土地を充用しなくとも第一等と第二等の土地によって栽培することができたとしよう。そうすれば、その直接の結果として地代が低下せねばならないことは明らかである。というのも、この時には、第三等ではなくして第二等の土地が地代を一切支払うことなしに耕作されており、そして、第一等地の地代は、第三等地と第一等地とのあだの生産物の差額ではなく、第二等地と第一等地との差額に過ぎなくなるはずだからである。人口が同じままでそれ以上増加しなければ、穀物に対してはどのような追加需要もありえない。そこで第三等地に充用された資本と労働とは、社会にとって望ましい別の諸商品の生産に向けられるのであり、そして、それらの諸商品の原材料が土地に資本をより不利な条件で充用しなければ取得できないために、第三等地が再び耕作されなければならないといったことがない限り、地代を引き上げる効果をもちえない。

「農業上の改良の結果として、あるいはむしろ、その生産により少ない労働が投下される結果として原生産物の相対価格が低下すれば、資財の利潤が大きく増加するのであるから、当然、蓄積の増加をもたらすであろう、ということも疑う余地のない真理である。この蓄積は、労働に対する需要の増大、賃銀の上昇、人口の増加、原生産物に対する需要の促進、および耕作の拡張へと導くに違いない。しかしながら、地代が以前と同じ高さになるのは、人口の増加が見られた後、すなわち、第三等地が耕作された後のことであるに過ぎない。それまでにはかなりの期間が経過して、地代は実質的には減少しているに違いない。

「しかし、農業の改良には二種類がある。土地の生産力を増大させるものと、機械を改良することによってその生産物をより少ない労働を用いて取得できるようにするものである。これらは両方とも原生産物の価格の低下に導き、これらはともに地代に影響を及ぼすが、しかし等しく影響を及ぼすのではない。もしもこれらの改良が原生産物の価格の下落を惹き起こさないならば、それは改良ではないであろう。というのは、一つの商品を生産するのに以前に必要とされていた労働量を減少させることが改良の本質であり、そしてこの減少は必ず、その価格または相対価格の下落を伴うからである。

「土地の生産力を増大させる改良とは、より巧みな輪作、または肥料のより優れた選択のようなものをいう。私たちが同一の生産物をより少量の土地から取得することを間違いなく可能とするのは、これらの改良である。もしも私が、蕪の栽培農法を採用することによって、穀物を栽培する以外に羊を飼育することが出来るのであれば、以前に羊が飼育されていた土地は不要となり⁸、より少量の土地を使用することによって同一量の原生産物を産み出すことができる。もしも私が、一区画の土地によって20パーセントだけ多くの穀物を生産しうる肥料を発見するならば、少なくとも私

の資本の一部を、私の農地のうちの最も不生産的な部分から引き揚げることができよう。しかし、以前に述べたように、地代を引き下げするためには必ずしも土地の耕作を放棄せねばならないといった必要はない。資本の諸部分が異なった成果を伴って同一の土地に次々に充用されているとして、地代の引き下げという効果を生み出すためには、最も小さな成果を生み出す資本部分を引き揚げればそれで十分なのである。もしも私が蕪の栽培農法を採用するか、あるいはもっと有効な肥料を使用することで、より少ない資本によって、しかも次々に投下する資本部分の生産力の間の差異を乱すことなく、同一の生産物を収穫しうるならば、私は地代を引き下げ得であろう。というのは、その他のすべての部分の生産力を計測する基準を形成するものは、今までとは異なった、より生産的な部分になるはずだからである。例えば、次々に投下される資本の諸部分が、もしも、100、90、80、70を産み出すとすれば、私がこうした四つの資本部分を充用する間に、私の地代は60になるに違いない。すなわち差額は、70と100との差額30、70と90との差額20、70と80との差額10の合計60になるであろう。これに対して生産物は、100、90、80、70の合計340であろう。そして私がこれらの資本部分を充用している間は、各資本部分の生産物が同等に増加するとしても、地代は同じままであるに違いない。つまり、もしも生産物が、100、90、80、70ではなく、125、115、105、95に増加するとしても、地代は依然として60であるに相違ない。すなわち、生産物は125、115、105、95の合計440に増加するのに対して、差額は依然として、95と125との差額30、95と115との差額20、95と105との差額10の合計60のはずである。しかし生産物のこのような増加をもってしても、需要の増加を伴わなければ、これだけ多くの資本を土地に充用する動機は存在しえないはずである。そこで一部分が引き揚げられ、その結果として、最後の資本部分が95ではなく、105を産出するものに

⁸ 蕪の根は、食用であるとともに家畜の飼料となる。

なれば、地代は30に低下するであろう。すなわち、生産物は125、115、105の合計345クォーターであるが、需要は340クォーターに過ぎないのであるから、それは人口の必要を満たすであろうが、この間、差額は105と125との差額20、105と115との差額10の合計30へと低下するはずである。しかし、改良の中には、土地の貨幣地代は引き下げるであろうが、穀物地代を引き下げることなく、生産物の相対価格を引き上げるものがある。このような改良は、土地の生産力を増加させないとはいえ、私たちに、その土地の生産物をより少ない労働によって取得することを可能にさせるものである。こうした改良は、土地の耕作自体に充用されるよりもむしろ、土地に充用される資本の形成に向けられる。この種の改良には、鋤や打穀機の改良、耕作に馬を用いる場合の節約、獣医術についてのより優れた知識といった農業上の諸手段の改良がある。土地により少ない資本が充用されるであろうということは、より少ない労働が充用されるのと同じことではあるが、しかし、同じ量の生産物を収穫するために、より少ない土地が耕作されるというわけには行かない。しかしながら、この種の改良が穀物地代に影響を及ぼすかいは、種々の資本部分によって収穫される生産物の間の差額が拡大するか、変わらないか、それとも縮小するかという問題に依存するに違いない。仮に、土地に50、60、70、80という四つの資本部分が充用され、各部分は同じ成果を上げるとしよう。そこで、このような資本を形成する上に何らかの改良が加えられ、私が、各資本がそれぞれ45、55、65、75になるように、これらから5づつを引き上げることができるとしても、穀物地代に一切変化は起きないであろう。しかし、もしもこの改良が、それによって最も不生産的に充用されている資本部分の全部を節約することが可能になるような種類のものであるとすれば、穀物地代はただちに低下するに違いない。なぜならば、最も生産

的な資本と最も不生産的な資本との間の差額が縮小するが、地代を構成するのはこの差額だからである。

「同じ土地の上に、あるいは新しい土地の上に次々と充用される資本部分によって収穫される生産物の間の不平等さを縮小させるようなものは、何であれ地代を引き下げる傾向があり、また、これらの不平等性を増大させるものは、何であれ必然的に反対の効果を生んで地代を引き上げる傾向がある。こうしたことの証明は、これ以上例証を増やさなくとも、十分尽くされたように思う。

「地主の地代について述べるに際し、私たちは、地代をむしろ、ある一定の農場においてある一定の資本によって収穫される生産物の間の割合だと見做し、生産物の交換価値についてはこれを一切考慮しなかった。しかし、生産の困難さという同じ原因は、原生産物の交換価値を引き上げ、そして地代として地主に支払われる原生産物の割合もまた引き上げるのであるから、この生産の困難によって地主が二重に利益を得ることは明白である。第一に、地主はより大きな分け前を取得し、そして第二に、地主に支払われる商品はより大きな価値をもつものとなる」。

「地代*」

* ジェイムズ・ミル氏の『経済学綱要』第3版より⁹。

「土地は、様々な肥沃度をもっている。例えば高い山々の頂きや石塊の多い場所であるとか、脆い砂地であるとか、ある種の沼地であるといった、不毛ともいえる類の土地がある。こういった類の土地と最も肥沃な類の土地との間に、中間的な肥沃度をもった一切の土地が存在している。

「土地はまた、最も肥沃なものであっても、それが生み出しうるすべてのものを、同じ容易さをもっては生み出さない。例えば、ある面積の土地

⁹ James Mill, *Elements of Political Economy*, 3rd ed., 1844, Chapter II, Section I, in *The Collected Works of James Mill*, Routledge/Thoemmes Press, 1999, pp.29-39. 邦訳『経済学綱要』春秋社、1848年、第二章第一節、24-34頁。以下は、この部分のはほぼ完全な引用となっている。

は、年々10クォーターの穀物を生み出すこともできようが、20クォーターの穀物も、30クォーターの穀物をも生み出すことができよう。しかしながら、一定量の労働をもって最初の10クォーターを生み出す土地は、ずっと多くの労働量を用いなければ第二の10クォーターを生み出さず、さらにもっと多くの労働量を用いなければ第三の10クォーターを生み出さない等々であって、追加の10クォーターの生産には、その都度、これに先んずる10クォーターの生産に必要とされたよりも多くの費用を必要とするのである。このことは、同じ土地部分からは、より大きな資本の支出によって、より多くの生産物が収穫される、という法則として良く知られている。

「最良の土地がすべて耕作に引き入れられ、そこに一定量の資本が充用されてしまうまでは、こうした土地に充用された資本はすべて同じ収穫量をもたらす¹⁰。それゆえ、どこの国においても、一定量の穀物が生産された後では、さらに多くの費用をかけないことには、さらに多くの穀物を生産することができない。もしもこのような追加量が生産されるとすれば、土地に充用される資本は二つの部分にわけることができる。すなわち、一つは比較的多くの収穫をもたらす資本であり、一つは比較的少ない収穫量をもたらす資本である。

「比較的少ない収穫量をもたらす資本が土地に充用される場合、資本は二つの方法のうちの一つをもって充用される。すなわちこの資本は、その時初めて耕作に引き入れられた肥沃度が第二番目である新しい土地に用いられるか、それとも、収穫を減少させることなく充用することのできる資本はすでにすべて充用されているような、最高の肥沃度の土地に用いられるかである。

「この資本が、肥沃度が第二番目である土地に充用されるか、それとも、最高の肥沃度の土地に第二次の投資として充用されるかは、それぞれの場合における二つの土地の性質と品質とに依るだ

ろう。もしも、最良の土地に充用される場合にはわずかに8クォーターしか生産しないはずの資本と同じ資本が、肥沃度が第二番目である土地に充用される場合には9クォーターを生産するとするならば、この資本は後者の土地に充用されるだろうし、逆の場合は逆であろう。

「第一番目の土地は最高の部類の土地であり、第二番目の土地は次に最高の部類の土地である等々といったような様々な肥沃度をもった土地は、論考の便宜のために、第一等地、第二等地、第三等地等々と呼ぶことができよう。同様にして、同じ土地に次第に収穫を減減させながら次々と充用される資本の様々な投資は、第一次投資、第二次投資、第三次投資、等々と呼ぶことができよう。

「土地が何も生産しないのであれば、その土地は占有する値打ちがない。耕作のためには第一等地の一部分だけが必要であるに過ぎないのであれば、耕作されない土地は一切何ももたらさず、つまり価値を有するものなどびた一文もたらさない。したがって、そうした土地は、当然のことながら占有されないままであって、その土地を生産的なものにしようとする者ならば誰でもそれを所有することができるのである。

「正確に言えば、こうした時期にある間は、土地は地代を一切もたらさない。耕作されている土地と耕作用としては未開墾の土地との間には、疑いもなく違いがある。ある者は、新しい土地を開墾するのではなく、開墾にかかった費用に対して、年々であれ別の方法であれ、等価を支払うであろうが、この者がそれ以上のものを支払わないことは明らかである。したがってこの支払いは、土壌の力に対するものではなく、単に土壌に投下された資本に対する支払いであるに過ぎない。この支払いは地代ではなく、利子である。

「しかしながら、人口が増加し食料に対する需要が増加するにつれて、第二等地に頼るか、それ

¹⁰ J.ミルの原文では、この文章の後に、「しかしながら、ある点に到ると、同じ土地に追加資本が充用されても、より少ない収穫しかもたらさなくなる。」というセンテンスが続くが、ウェイクフィールドの引用からはこのセンテンスが抜け落している。

とも第一等地へ生産性は落ちるけれども二次的な投資を行うか、という必要に迫られる時がくる。

「もしもある者が、第一等地に充用された一定量の資本は10クォーターの穀物を生産するのに、同じ資本によってわずかに8クォーターの穀物しか生産できない第二等地を耕作するとして、この者にとっては、第一等地を耕作する許可に対して2クォーターを支払おうが、何も支払わずに第二等地を耕作しようが、何の違もないであろう。そこでこの者は、第一等地を耕作する許可に対して2クォーターを支払うことに同意するであろう。そして、この支払いが地代を構成するのである。

「また、第二等地を耕作するよりも第一等地に第二次の資本を投下することがずっと得策であって、第一次の資本は10クォーターを生産するが同額の第二次の資本は8クォーターを生産するはずだと仮定しよう。前の場合と同様に、この場合においても含意されていることは、更なる資本を仮定された10クォーターよりも大きな成果を生むように充用することは全く不可能であることであり、また、8クォーターという僅かな収穫しか生まないのに資本を喜んで充用する者が存在するということである。しかし、もしも僅かに8クォーターの収穫しかない土地に資本を喜んで充用しようという者が存在するのであれば、地主は、8クォーターより多く生産されたものをすべて自分が獲得するという契約を結ぶことができるだろう。こうして、地代に対する影響は、両方の場合とも同じである。

「そこで地代は、継続的に土地に投下される資本の生産力が逡減するにつれて増加することになる。もしも人口が次の段階に達するならば、すなわち第二等地がすべて耕作されて、8クォーターではなく僅かに6クォーターしか生み出さない第三等地に頼らねばならなくなる段階に達するならば、同じ推論過程を辿って、今や第二等地が地代として2クォーターをもたらすであろうし、そして第一等地のもたらす地代は増大して2クォーター以上になることは明らかである。肥沃度の劣

る土地に頼る代わりに、生産物は上と同様に減少するけれど、第一等地に第二次のさらには第三次の資本を投下するとしても、事態は全く同じであろう。

「かくして私たちは、地代についての一般的な命題を得ることができるだろう。様々な肥沃度の土地に資本を充用しようと、あるいは同じ土地に一定分量の資本を継続的に充用しようと、このようにして充用された資本のある部分は比較的大量の生産物をもたらす、ある部分は比較的少量の生産物をもたらす。最小の生産物をもたらす資本が、資本家が資本を回収し報酬をえるために必要なすべてのものを生み出す。資本家は、彼が充用する資本のどのような部分に対しても、この報酬以上のものを一切受け取らないであろう。というのも、別の資本家との競争が、彼にそうはさせないからである。地主は、この報酬を超えて生み出されたすべてのものを占有することができるだろう。それゆえ地代は、土地に充用された資本のうちの、最も生産的な部分が生み出す収穫と、最も不生産的な部分が生み出す収穫との差額である。

「例えば、10クォーター、8クォーター、6クォーターの三つの場合を採ってみるならば、私たちは、8クォーターしか生み出さない資本部分にとっての地代は6クォーターと8クォーターとの差額であり、10クォーターを生み出す資本部分にとっての地代は6クォーターと10クォーターとの差額であることに気づくし、また、かりに一つは10クォーターを生み出し、もう一つは8クォーターを、さらに別の一つは6クォーターを生み出すような三つの資本部分が同じ面積の土地に充用されるとすれば、それらの地代は、第一次投資部分にとっては4クォーター、第二次投資部分にとっては2クォーターであり、全体としては6クォーターとなるだろう。

「もしもこうした結論が十分に支持されれば、地代の学説は単純なものであり、しかも私たちが後で見るように、その帰結は極めて重要である。こうした結論に対して可能だと思われる反論が一つだけある。土地が占有されて以降は、土

地を無償で自由に使用させる地主などは存在しないのであるから、地代を支払わない土地部分などは存在しないと言われるかもしれない。この反論は実際に生じたのであって、スコットランドの山岳地帯の最も不毛な土地に対してさえも若干の地代は支払われていると主張されたのである。

「この反論は、もしもそれが受け入れられれば、こうした結論に大なり小なりの影響を及ぼすものである。しかし、反論において主張されている事柄がたとえ容認されたとしても、それでもなお、この結論が依然として、実質的に、また実際的な目的の上から真理であるに違いないならば、この反論は、反対者の頭脳における二つの欠陥のうちの一つによるものであるに違いない。つまりそれは、反論者の主張する事柄が彼の否定する学説にとっては極めて小さな程度の影響しか及ぼさないということ認めまいとする思考の混乱のためであるか、あるいは、その学説に反対すべき理由が何もないにも拘わらず、学説を是認することを故意に避けようとする意向のためであるかのどちらかであるに違いない。

「この反論において主張されている事柄は、たとえそれを受容したとしても、あらゆる実際的な目的にとっては、先の結論を依然としてそのままにしておくに違いない。このことは、事情が暴露されるやいなや承認されざるをえなくなる。極端な話をしなければ、スコットランドの不毛の山岳地帯に対して支払われる地代が僅かで取るに足りない金額ではないなどとは、厚かましくてとても言えるものではない。例えばその金額が1,000エーカー当たり5ポンド、すなわち1エーカー当たり約1ペニーであるとすれば、耕作の費用は1エーカー当たり数千ポンドを下回ることはないから、耕作の費用に対する比率は極めて小さいはずである。このことは、私たちが例証しようとしてきた結論の正しさにはほとんど影響を及ぼさないに相違ない。

「論証のために、最劣等地の耕地が1エーカーにつき1ペニーを支払うものとしよう。耕作されている最劣等地にも1エーカーあたり1ペニーが

地代として支払われているのであるから修正が必要ではあるが、この場合にも地代は、上で証明したように、種々の資本部分によって生み出される生産物の差額であろう。他のすべての点において正しいのであれば、確かにこの1ペニーを度外視しても、私たちの結論はそれほど大きく誤ってはいないであろう。それどころかこの度外視は、極めて僅かではあるが、この問題についての私たちの説明を簡素化するという利点があるのだから、認められるに違いない。

「しかし、形而上学的な正確さからさえも、私たちの結論がこのような何がしかの修正を必要とするというのは正しくない。土地には、例えばアラビアの砂漠のように、何も生み出さないものがある。こうした土地から最高の肥沃地までの間に、ともかくも中間程度の土地がある。土地の中には、人類に役に立つものを一切何も生み出さないわけではないが、その耕作に必要な労働者を扶養するためのものを生み出すことのできない土地が存在する。こうした土地が耕作されることは決してない。また、年々の生産物がその耕作に必要な労働を扶養し始めたばかりで、それ以上のものを生み出さない土地もある。この土地は、どうか耕作することはできるとしても、地代を支払うことは明らかに不可能である。従って先の反論は、事実の上で重要でないだけでなく、形而上学的にも不当である。

「地代をもたらない土地は、つまり人間の労働のためにこうした労働を扶養するのに必要であるはずのものよりも多くを生み出すことのできない土地は、こう断言しても差し支えないが、相当の面積を有する国であれば、どのような国にも存在する。少なくともこの国がこうした状況にあることは、全く議論の余地がないように思われる。この国には、ヒースよりも弱い植物は生育できない山岳地帯が存在し、コケ類以外には何も育たない地域もある。スコットランドの山岳地帯ではあらゆる場所で地代が支払われると主張される場合、実情が誤解されているのである。事実はただ、スコットランドの高地地域におけるある者の地所

のある部分においては、地代を支払っていない借地農がない、ということだけである。というのも、溪谷では、スコットランドの山岳地帯においてすらも、生産物が相当にできる場所が存在するからである。こうした溪谷に数千エーカーにおよぶ山地を付け加えたとしても、だから山地のあらゆる部分が地代をもたらずということになりはしない。山地の多くの部分が地代をもたさず、またもたらしえないということは確かである。

「土壌が間違いなく不毛だというわけではない場所や、比較的強健な役畜を飼う余地が少しぐらひはある場所であっても、それらがすべて地代を必ずもたらずと認められるわけではない。銘記されるべきは、こうした家畜は資本であって、土地はこうした資本に対して十分な報酬を与えるばかりでなく、なお、この場合には、ことに冬季においては少なからず必要とされる家畜の世話に対しても十分に支払うだけのものを生み出さねばならない、ということである。土地は、こうしたものをすべて生み出し、それ以上にいくらかのものを生み出すのでなければ、地代をもたらずことなど決してできはしない。

「この島国の大部分においては、相当の面積を有する農地のほとんどが、ある部分は比較的肥沃であるがある部分は比較的肥沃ではない土地を含んでおり、つまりは、肥沃度の高い土地や中程度の土地から地代をもたらずに足るだけの十分なものを生み出さない土地に到るまで様々な土地を含んでいる。もちろん私は、私の権威を信じてこうした主張を是認せよと要求するものではない。私は、事情に最も良く通じている人々の経験に訴えているのである。もしも実情がこの主張と一致するのであれば、耕作されている土地の最後の部分が地代を一切もたさずすることは明らかである。私たちが今述べたような農場においては、借地農は一定額を地主に支払うよう契約した。もちろんこの契約は、その耕作に投じられた資本に対する適切な報酬だけでなくさらにそれ以上のものを生み出すこの土地の生産物を当てにしていることで

あった。借地農が耕作しようという動機はすべて彼の資本に対する適切な報酬から成り立っているのであるから、もしも彼の農場の中に、かっさり資財の利潤だけを生み出すが、しかしそれ以上のものは生み出さないような不毛の土地が含まれていたとしても、その土地は、地代としてもたらずものは何もないとはいえ、耕作に対する十分な動機は彼に与えるのである。土地はその肥沃度を高いものから低いものへと目に見えない程度で落としてゆくのであるから、相当な規模をもつすべての農場では、先に述べた程度の不毛の土地やそれ以上に不毛である土地が普通に見出される、ということとはほとんど否定できない。

「しかしながら先の結論は、すべての土地が地代を支払うか支払わないかという問題とは無関係に、明白な証拠によって証明することもできる。私たちは、最も高い地代を支払う土地については、次々に充用される資本の諸部分が同じ収穫を伴わないということを既に知っている。第一次の投下資本部分は、その資本に対する報酬よりも大きなものを、恐らくはかなり大きなものを生み出す。第二次の投下資本部分もまた、比較的大きなものを生み出しうる、等々。地代は、正確に計算すれば、こうしたいくつかの投下資本部分によって資財の利潤を越えて生み出されたすべてのものに等しいであろう。もちろん耕作者は、こうしたいくつかの投下資本部分のすべてを、地代を支払うべく合意した土地に充用する。しかし、それらを投下した直後には、地代を全くもたさずにしても、資財の通常の利潤であればすべて生み出すことのできる次の資本部分が続いて投下される。農業者が耕作するのは、資財の利潤のため、ただそれだけのためである。それゆえ、農業者は、農場に充用した資本が資財の通常の利潤を生み出す間は、もてる限りの資本を投下するのである。従って私は、確信をもって次のように結論づける。すなわち、事情が自然の状態にあるならば、あらゆる農業国においては、土地に充用された資本の一部は地代をもたさないのであり、従って、地代はすべて、最も生産的でない資本部分に

対する報酬を越えて、つまり農業者が自分にとって不可欠の利潤として受け取らなければならないものを超えて、より生産性の高い資本部分によって生み出された生産物からなっている」。

リカード理論の要点は、次のような二つの肯定的な見解からなっている。すなわち、第一の見解。地代は、耕作から生み出された剰余生産物から、つまり、通常の利潤とともに資本を回収する生産物部分を越えて生み出された剰余から構成される。

第二の見解。この剰余生産物すなわち地代は、限界を有する投資分野において人口と資本とが増加するために、最劣等の土壤に頼らなければならないことによって、あるいは同じ土壤に比較的少ない報酬をもって資本を充用せねばならないことによってもたらされるのであり、またそれらに比例する。

こうした肯定的な見解は、次のようなある種の否定的な別の見解を伴っている。すなわち、第一の見解。地代を構成するのは、耕作における剰余生産物以外の何ものでもない。

第二の見解。この剰余生産物は、比較的多くの資本を比較的小さな報酬をもって充用せねばならないこと以外によつては、決して発生しえない。

否定的な見解の方は間違っているはずであるが、肯定的な見解は正しいかもしれない。剰余生産物は常に地代を構成すると仮定してみよう。とはいえ、剰余生産物から構成されるのではない地代も支払われうる。比較的多くの資本を比較的少ない報酬をもって充用するという必要が、剰余生産物をもたらす。とはいえ、剰余生産物は、こうした必要とは別の諸手段によつてもたらされる。こうした区別は、極めて重要度の高いものである。というのも、こうしたことを心に留めておくことで、私たちは、リカード理論の肯定的な見解は疑いなく正しいけれども、別の見解は確かに誤ったものであることを理解するはずだからである。

否定的な見解が明らかにもっている効果は、肯

定的な見解を土地の使用に対するあらゆる種類の支払へと及ぼさせることである。この否定的な見解が誤っていることを理解すれば、私たちは肯定的な見解を、その中ではこの見解が明らかに正しいという限界内に限定することになるだろう。

地代は、必ずしも常に剰余生産物から構成されるわけではない。土地は、販売するための何らかの商品を育成するという目的以外にも、ごく頻繁に必要なとされる。例えば、土地はしばしば、利潤のことなど少しも顧みることなく、娯楽という目的のために必要とされる。そしてどのような国でも、土地所有者が、地代として受け取った多量の剰余生産物を別の土地所有者に自から支払い、あるいは誰かに転嫁して支払わせている。彼らは、エーカーあるいはヤード当たりでいえば、彼らが地代として受け取る率の10倍を、あるいは1,000倍さえをも支払っているのである。この国における地代総額の大きな部分は、住居として好ましい場所にお互いに近接して住むことのできるような国民によって支払われている。ある地主は、ロンドンの快適な場所にある約600エーカーの地所地代として、年間に10万ポンドを受け取ると言っている。海浜行楽地と呼ばれる都市の内外で支払われる地代は、剰余生産物を決して構成部分としてはおらず、また、従来土地の耕作によって生み出される剰余生産物として支払われてきた地代よりもはるかに高額である。こうした事例は限りなく積み上げることができよう。しかしながらこうした事例が十分に示しているのは、リカード理論における第一の否定的見解が確かに間違っているということである。そうであれば、第一の肯定的見解は、果たしてどの程度正しいのであろうか。そのことは、この見解における言葉、すなわち、通常の利潤とともに資本を回収する生産物部分を越えて耕作から生み出された剰余生産物、というこの言葉自体が示しているように思われるだろう。リカード氏自身は、自らの研究を「土壤の自然で不滅の力に対する支払い」に限定する際に、そのように述べた。しかし彼は、自らの研究の限界に気づかなかつた。リカード氏や、さら

には彼の追隨者であるミル氏やマクアロック教授は、このような狭い限界の内に、あらゆる種類の地代を引き込んだのである。

第二の否定的な見解が第一の見解と同じように正しくないということは、次のような場合によって明らかであろう。すなわち、こうした見解を反証することになるのは、剰余生産物したがって地代が、比較的少ない報酬をえるために比較的多くの資本を充用せずとも増加するようなあらゆる場合である。

1. 第四等地、第三等地、第二等地、第一等地という自然の地質をもった四つの土地がある。現実的な農業技術の状態からして、第四等地は生産費に等しい生産物を生み出さないと思われ、従って耕作されないままである。第三等地は10クォーターを生産するが、これははっきり、通常の利潤をもって資本を回収するだけであるにすぎず、従って地代は一切もたらさない。第二等地は15クォーターを生産し、そこで、地代として5クォーターをもたす。第一等地は、地代として10クォーターをもたすべく、20クォーターを生産する。いま農業上の改良が起り、これによって、各場合に充用される資本は変わらないままであるのに、各土地部分の生産物は5クォーターだけ増加する。利潤が同じままであるとすれば、第一等地の剰余生産物は今では15クォーターであり、第二等地のそれは10クォーター、そして、以前には剰余生産物を一切もたらさなかった第三等地の剰余生産物は5クォーターである。こうした改良は恐らく第四等地の耕作を可能とするが、それは、通常の利潤率に引き合う報酬が得られるからである。そして今までのところ、第一等地および第二等地の地代が増加し第三等地に地代が生まれるとすれば、頼みの綱として当てにされるのは自然の肥沃度で劣った土地であろう。しかしこの場合、第一等地および第二等地の比較的高い地代が生まれ第三等地に若干の地代が生まれる原因は、劣等地に頼る必要では決してないはずである。その原

因は農業上の改良に違いなく、それによって資本の総生産物が増加し、劣等地が耕作に適するようになったことである。

この国において40年前に起こったような農業技術上の大きな改良は、農業における総生産物を大きく増大させた原因である。こうして増加した生産物はすべて、恐らく最初は資本家と労働者との間に比較的高い利潤と比較的高い賃銀という形で分配される。しかし間もなく、比較的高い賃銀によってもたらされる労働者の増加は賃銀を元の水準に低下させ、そして、比較的高い利潤によってもたらされる資本の増加は利潤を元の水準へと引き下げる。こうしたことが起こるやいなや、技術の改良によって増加する生産物はすべて、より高い地代という形で地主の手に落ちる。このようにして一国の総地代は、もしも改良された技術によって農業資本の生産性が二倍にあるいは三倍になれば、二倍にも、あるいは三倍にもなりうるが、こうしたことは、農業技術の改良が起こる以前に生産性が最も低い資本部分が獲得していたよりもっと低い報酬をもって資本を充用する必要など少しも伴わずに起こるのである。なるほど、こうした過程が進む間に劣等地が耕作に引き入れらるであろうが、とはいえその原因は、劣等地に頼る何かしらの必要ではなく、以前には十分に報いるだけの報酬をもたらさなかった土地が今ではそうした報酬をもたらすはずだということである。イングランドにおいては、アルフレッド大王¹¹の時代よりこの方、農業の剰余生産物と耕作のために使用される土地の地代はすさまじいまでに増加した。もしもこうした増加がすべて劣等地に頼る必要がどんどん増したためであったとすれば、アルフレッド大王時代における資本の最低報酬は、現在における最低報酬を遥かに凌いでいたに違いない。しかし、事実は恐らくこれとは反対であり、現在の最低報酬はアルフレッド大王時代の最大報酬を、あるいはヘンリー三世¹²時代の最大報酬すらも凌いでいる。従って、進歩しつつある諸国

¹¹ Alfred (849-899)。中世イングランド、ウェセックスの国王。

¹² Henry VIII (1491-1547)。イングランドはチューダー朝の国王。

において地代が増進する主な原因は、農業における技術改良の進展であるように思われる。地代についてのこの原因は、リカードウ理論の第二の否定的見解からは完全に排除されている。

2. 剰余生産物あるいは地代が、資本への報酬の減少も増加もともなうことなく増加するに違いない、といった社会状態を想定することは可能である。こうした事態が、最近、アイルランドの大部分において起こったように思われる。もしも膨大な数の人民が、馬鈴薯を食べ、掘っ建て小屋に住み、粗末な衣服を身にまとい生きて、そして彼らが、こうした掘っ建て小屋や粗末な衣服や馬鈴薯以上に生産するものすべてを、こうして生きる許しをえるために支払うといった事態に陥っているとすれば、その時には、彼らが住んでいる土地の所有者は、資本と労働とに対する報酬は不変のままであるのに、彼らがより少ないもので我慢するのに比例してより多くのものを獲得しているのである。悲惨な借地人が差し出すものを、地主がかき集める。アイルランドの地主たちが彼らの哀れな借地人たちから獲得している甚だしく高い地代は、こうした理由によって説明されるように思われる。もしもアイルランドにおいて、農業上の技術に何らの改良も施されないのに生活水準が上昇するとすれば、地主のための剰余生産物はより少なくなるに違はなく、地代の下落は避け難いはずである。大地を耕作する人々の生活水準の低下が剰余価値および地代の生まれるもう一つの原因であるが、これは、リカードウ理論の第二の否定的見解が完全に排除していることである。

イングランドのようにずっと文明化された国では、剰余生産物は賃銀の低下によって、つまりは生産費の減少によって増加するかもしれない。このことは、劣等地などが全く耕作されずとも、あるいは比較的少ない報酬で比較的多くの資本を充用することがなくとも、あるいは改良された技術を通じて総生産物が増加することが一切なくとも起こりえよう。イングランドの農場における地代は、近年、農業生産物で測れば賃銀の低下にも拘わらず上昇している。イングランドの南部諸州で

はまた、農場労働者に一般的な率よりも低い賃銀を支払うことによって、生産費が人為的に減少させられてきた。この注目すべき策謀は、結局は土地に対して税金を課す結果になったとはいえ、一時は生産物のうちの剰余部分が増加し、したがって土地の価値が増大するという効果をもたらしたに違いない。今日では、こうした税金が、地主や一部は労働者を雇うことのない階層の人びとがかつて農業労働者への賃銀支払いから引出したあらゆる利益を、大幅に上回っているのである。賃銀が低下する際に剰余生産物に及ぼされる結果は、生活水準が低下する場合と同様である。すなわち、生産物全体は同じままであるのに剰余部分はより大きく、生産者はより少なく受け取り、地主はより多くを受け取るのである。リカードウ理論では、利潤は剰余からなると言う。しかしながら、剰余を増大させる仕方は一つではなく、もっと多く存在するのである。

3. イングランドでは、この20年を通して、貨幣で測った農業地代は低下している。そして世間の言うところでは、この時期よりも前には、多くの地所が固定された貨幣額の支払いを課されてきたので土地の所有者たちは重い損失に苦しんできた。しかし、これだけが唯一公平に測ることのできるものであるが、農産物で測った農業地代は、この20年を通して、実際には低下するどころか上昇してきたのである。大きな下げ幅だと思われようが、小麦の価格がクォーター当たり100シリングの時から、貨幣地代が40パーセント低下したと仮定しよう。それでも、小麦の価格がクォーター当たり40シリングに低下し、地代が40パーセント低下したとすれば、小麦の価格は60パーセント低下しているので、地代は以前よりも50パーセント高い。以前は貨幣100ポンドで、あるいは小麦20クォーターで貸出されていた農場が、今では貨幣60ポンドで、あるいは小麦30クォーターで貸出されている¹³。これは極端な例であるかもしれないが、しかし、いやしくも事実に精通した人であれば誰でも、農産物で測った農業地代が20年前に較べてより高いということは否定しないである

う。一体、地代のこの増加はどのようにして起こったのであろうか。私たちは、劣等地の耕作に頼ったのであろうか。いや反対であって、この20年の間、かなりの数の劣等地が耕作から引き揚げられてきた。地主の手に落ちる剰余部分を増大させるように、技術の改善によって農業での総生産物が大きく増加したのだろうか。恐らくそうではない。というのは、活発な戦時需要と高い貨幣価格の時代よりこの方、土地はそれほど大きな配慮を加えて耕作されてはこなかった、というのが普通に聞かれる不平だからである。そうであれば、この実質地代の増加は果たして何に起因させるべきだろうか。最後の場合に注意すれば、恐らくその原因の一部は、救貧税の実際の税額が膨大なまでに膨れ上がったので完全に中和されてきたように思われるとはいえ、賃銀の低下による生産費の低下に起因するが、しかし主には、次のような事実によって指摘される原因に起因する。すなわち、この20年の間に、イングランドの農業者の状態は、悲惨なことにますます悪い方向へと向かった。恐らくは、現在の農業者全体の半数を数えるほど多くが完全に破産し、資本のすべてを失い、他人にとって代わられたが、後を継いだ人々も常に破産の危機に瀕している。この期間を通じて、相当多くの農場が、破産した借地人を二、三人は抱えており、25年前に多くの農業者が暮らしたように暮らしてゆけるほどの利益をえている者などは誰一人としていなかった。農業者は、現在の小規模な商店主も同じであるが、彼らの父親に較べれば乞食と同類である。農業者は自分たちの資本から地代を支払うことに不平をこぼすが、彼らの多くが毎年破産してゆくのを見れば、こうした言い分も本当であるように思われる。しかし、借地人が破産して空き地となった農地を巡る競争は、少しは軽くなるのではなからうか。いや、そのよ

うなことはない。逆であって、農産物で測った場合には地代がしばしば増大している状況の下では、このような農場を巡って行われる競争は厳しく、その厳しさは、すべての農業者が財産を築くか、あたかもその農場の所有者であるかのように暮らしてゆけた時代と同様である。利潤の問題について施した註解に照らして言えば、破産した農場を巡るこの競争は、資本の過剰に起因させることができる。しかし、このような競争は地代にどのような影響を及ぼすのだろうか。生産物のうち、農業者が自分自身のために残しておき、財産を形成するかあるいは地主のように暮らすために使用する部分は、すべて土地の所有者に移転される。それは、サミュエル・ガーニー氏が「現行の厳しい競争」と呼ぶものによって移転させられるのである。借地人が譲り渡すものを、地主が掻き集める。こうしたことの結果は、リカードウ理論が地代を農業の剰余生産物として描くことと完全に符合している。馬鈴薯で暮らしているアイルランドの小作人が馬鈴薯を栽培する許可を買うためにますます多くのものを与えねばならないように、イングランドの農場主もまた、過当な競争によって極めて低い利潤に甘んじ、損失さえも我慢するように強いられており、極めて苦しい生活状態に喘ぐ許可を地主から買い取るために、ますます多くのものを与えなければならぬのである。利潤の低下は、賃銀や生活水準の低下と同様に、余剰となる生産物部分を増加させ、したがって地代を上昇させる。地代のこの原因は、他の二つの原因と同様に、リカードウ理論の第二の不定的な見解によって完全に排除されている*。

*イングランドの農業者と地主とは、一方の階級にとっては極めて害悪であるが他方の階級にとっては利益となるような競争の根本的な原因、すなわち資本の過剰に対

¹⁵ ウェイクフィールドが言っているのは、次のようなことであろう。貨幣地代が100ポンドの時、小麦価格がクォーター当たり100シリング（5ポンド）であれば、100ポンドの貨幣地代は小麦20クォーターに相当する。今、貨幣地代が100ポンドから40パーセント低下して60ポンドになったが、小麦の価格が60パーセント低下してクォーター当たり40シリング（2ポンド）になれば、貨幣地代である60ポンドは、小麦で30クォーターに相当する。従って、貨幣地代は40パーセント低下したが、小麦価格がそれ以上低下したために、穀物で評価した貨幣地代は20クォーターから30クォーターへと50パーセント増加したことになる。

しては、等しく盲目である。

農業資本が、極めて低い利潤で充用されるにもかかわらず、あるいは損失を出すにもかかわらず、増加に向かう方法については、資本についての項において取り扱おう。

4. 劣等地に頼る必要など一切なくとも、農業における剰余生産物を、従って農業の目的で使用される土地の地代を増加しうる方法がもう一つあるように思われる。いやむしろ、こうした事態は実際にいく度もいく度も繰り返して起こったのであり、この場合に農業地代は、一種類の食糧の供給を優れた自然の地質をもった土地に頼ることによって増加したのである。トレンズ大佐は言う*。「ランカシャーの原野では、元来、人間が穀物を栽培することなど不可能であった。というのも、この原野を開墾し耕作をおこなう労働者が消費するのに必要な穀物の量が、彼らの生産しうる穀物の量を超過しているからである。しかし、アイルランドやその他の国から安価な穀物がもたらされた。富と人口との増大は、奢侈的農産物に対する、つまり農場労働者の生計には入らないので彼らを再生産することには支出されないような農産品に対する、強く幅広い需要を創り出した。その結果、不毛な原野が今では大きな価値をもった収穫物を生み出し、イングランドの最も肥沃な穀物畑よりもっと高い地代を支払っている」。アダム・スミスが次のように述べる時、彼はこの原理に触れているのである。すなわち、「大都市の近郊においては、牛乳や飼料に対する需要のために、肉屋が売る食肉の値段が高くなるとともに、牧草の価値が、穀物の価値に対するいわゆる自然の割合以上に引き上げられることがしばしばある。…特殊な事情によってある国の人口が時として極度に稠密になり、そのため全国土をもってしても、大都市近郊の土地におけると同じ様に、住民の生存にとって必要な牧草と穀物を双方とも十分に生産

することができなくなったことがある。従ってそうした国の土地は主に、穀物に比べるとずっと嵩張り、長い距離を輸送するのがそれほど容易ではない牧草の生産に充用され、大多数の人民の食糧である穀物は、主に諸外国から輸入された。現在、オランダはこの状態にあり、古代イタリアの多くでも、ローマ人が繁栄していた間はそうであった。キケロ¹⁴が教えるところによると、大カトー¹⁵は、「家畜を」上手に飼育することが私有地経営上においてまずなされるべき最も有利なことであり、第二位は一応よく飼育することであり、第三位は不十分にしか飼育しないことだと語った。カトーは、土地を鋤き返すことを、私有地経営の利潤と利益の点では第四位にしか位置づけていない¹⁶。ジェノヴァの国土も、常にこうした状態にあった。元来この地方の土地は極めて不毛な地質のものであり、確かに穀物の生産には全く向いていない。それにも拘わらずこの土地は、そう遠くは離れていないポー川流域の平原における最も肥沃な穀物畑よりも、平均すればずっと高い地代を生み出している¹⁷。だが、それは一体なぜなのか。それは、これらの肥沃な土壌で栽培された安価な穀物を輸入することによってである。穀物の安さは富と人口とを増進して、ジェノヴァの国内に、この土地が生産することのできる、例えば野菜や果物やオリーブ油や葡萄酒や絹といった農産物に対する需要を生み出した。このようにして、もしもずっと穀物の栽培に充用されてきたならば生産費を賄う以上の生産物も、あるいは地代も全く生み出さなかったに違いないジェノヴァの国土が、輸入される穀物が安価であるために生産費が低く抑えられることから、今では膨大な剰余生産物と高い地代とを生み出している。もしもオランダの人民が、どこか他の国から安い穀物をえることができないために生産費を大幅に増加させながら、自国内で人民が消費するあらゆる食糧を栽培

¹⁴ Marcus Tullius Cicero (BC106-BC43)。共和制擁護に尽力したローマの政治家、哲学者。

¹⁵ Marcus Porcius Cato Censorius (BC243-BC149)。第二ポエニ戦争で活躍した古代ローマの政治家。著書に『農業論』がある。

¹⁶ *W.N.*, pp.165-6、第1分冊262-3頁。

¹⁷ ジェノヴァはイタリア半島西側のリグリア海に面しているが、ポー川はイタリア半島を東に流れてアドリア海に注ぎ、広大なパダノ・ヴェネツァ平野を形成している。

することを強いられたとすれば、オランダの地代は果たしてどのようになったであろうか。この場合、もしも剰余生産物が地代の尺度であるならば、剰余生産物が減少するのに正確に比例して地代は低下したに違いない。土地の生産物はより大きな支出によって栽培されたはずであり、従って、剰余の形で地主のために残るものは生産物のうちのより少ない部分であるに違いない。このようにオランダでは、この国の人民が自らの食糧をすべて自国で生産するよう強えられることで地代が減少したに違いないとすれば、わが国の穀物法は、安価な穀物の輸入によって農業地代が上昇するのを妨げているように思われる。オランダで実際に起こったことは、わが国でも起こりえよう。わが国は、安価な穀物を輸入することによって、穀物を除くあらゆる種類の農業生産物に対する新たな需要を創出するであろう。労働者用食糧の主たる品目である穀物が安くなれば、こうした他の種類の生産物はすべてより少ない費用で生産されるはずであり、そうすれば、地主にはより大きな剰余が残されるに違いない。このことは、他の諸国から安価な穀物を買うための無限の製造力を有し、穀物以外の様々な種類の農業生産物に対する需要に限界が課せられることなど一切ない国では、恐らく、地代の最も強力な原因となるだろう。穀物を、それを最少の費用で生産する国から輸入することによって、最も高い地代が生み出されたのであり、それも、普段の食糧を栽培するという目的にとっては、劣等地ではなく優れた地質の土地に頼ることによって生み出されたのである。この地代の原因は、漠然とした言葉ではなく、精密で明確な言葉をもって、リカードウ理論の第二の否定的見解から排除されている。それどころではない。もしもこの否定的見解が正しいとすれば、ここで論じた成り行きは、地代低下の原因であるに違いない。

* Colonization of South Australia, p.280.¹⁸

先の例からすれば、耕作によって剰余生産物を、つまり通常の利潤をもって資本を回収する以上の余剰の生産物を増加させる方法が、資本をより小さな報酬をもって充用する必要を伴う方法以外にも、数多くあることは明らかである。従って、リカードウ理論の第二の否定的な見解は全くの誤りである。そうであれば、第二の肯定的な見解はどうなるのだろうか。今や、この見解が真理を保つ限界を理解することができる。より小さな報酬をもって資本を充用する必要というのは、地代の普遍的な原因ではない。これが常に原因をなすような類の地代は、唯一、人民の普段の食糧を育成するのに利用される土地の使用に対して支払われる地代だけである。

この学説がもっているこうした限界には、大きな重要性がある。リカードウ理論が指摘している一種類の地代についての一つの原因は、住民が自分たちの普段の食糧を自国よりも比較的肥沃な土地を有する国から輸入することができるような国ならどこであれ、めったに作用しない。またこのような場合には、こうした原因が作用する割には、ずっと強力であるように思われるもう一つ別の原因が作用することによって、その作用は抑制されるか、あるいは妨げられる。オランダで支払われている高い地代は、必需品地代¹⁹と名づけられるようなものではない。それは剰余生産物地代²⁰であり、次第に小さくなる報酬をもって資本を次々と充用することによって人民の普段の食糧を獲得する必要がまったくないことに依存する地代である。さらにまた、必需品地代の増加は、普段の食糧を生産するのにより少ない報酬をもって資本を充用せねばならないのだから当然であるが、普段の食糧の交換価値を労働に較べて一層高くするのであるから、確かに人民大衆の生活状態の悪

¹⁸ Robert Torrens, *Colonization of South Australia*, 1835, 2nd ed., 1836, in *Collected Works of Robert Torrens*, vol.IV, p.280. 全集に収められているのは1836年の第2版であるが、これは主に付録を追加したものであり本文に大きな変更はない。

¹⁹ 原語は「necessity rent」。

²⁰ 原語は「surplus-produce rent」。

化をとまなっている。これに対して、もう一つ別の地代の増加、すなわち、外国の土壌ではあるが優れた土壌から普通の食糧を獲得することによって剰余生産物が増加することからもたらされる地代の増加は、人民大衆の生活状態の悪化など全くともなわないだけでなく、その改善をとまなつて起こるのである。普通の食糧とその他の種類の生産物とを区別したアダム・スマスは、この差異をいくらか理解していた。リカードウ氏は、この差異には全く気づかなかつた。とはいえ、こうしてリカードウ氏が明瞭に示してくれたのは、もっと強力な地代の原因のために、そしてとりわけ人民の幸福のために慎重に回避すべき地代の原因がある、ということにアダム・スマスが気づいていたなどと言うことはほとんどできないということである。剰余生産物の原因をすべて考察した場合には、こうしたことが、リカードウ理論の有するこの上なく貴重な価値である。

リカードウ理論は、その叙述のどれ一つとして正しい認識を示していないとはいえ、立地が土地の剰余生産物に及ぼす影響は認めている。二つの土地のうち、一つは都市の近くにあり、もう一つは都市から離れている場合、それらの土地の剰余生産物には極めて大きな差があるに違いない。この二つの場合、生産物を市場へと運搬し肥料を都市から運搬する費用には大きな格差があるだろう。そして、都市に近い土地に有利に働くこの格差はすべて、地代として地主の手に落ちる剰余である。リカードウ氏もミル氏も、肥料や市場にかかわる立地の優位性は自然の肥沃さにかかわる優位性と同じことだと明瞭に述べている。これら二つの事柄は、それらが剰余生産物に同じ影響を及ぼす限りでは同じであるが、しかし別の一点に関しては極めて異なっている。自然の肥沃さにかかわる優位性は普遍のものであり、それは増加させることも減少させることもできず、それを創造することは不可能である。これとは反対に、立地の優位性は取り除くことも付け加えることもできる。それは、都市が没落すれば取り除かれるし、

都市や都市に通ずる新しい道路が建設されることによって、また道路が改善されることによってすら付け加えることができる。この違いがもたらす結果に注目してみよう。どのような土地であれ、人口と富の増加は自然の肥沃さを少しも増加させはしないけれども、他方で、一国のなかで人口と富との増加が常態となったすべての地域では、多くの土地に以前にはなかつた立地の優位性がもたらされる。この土地に関しては、資本の報酬を最低限に低下させることがないだけでなく、若干の資本は報酬を増加させることによって、剰余生産物と地代とが増加するという事態が起こつた。同じ結果は、恐らく、人口と富との増加が全くなくとも生み出されたであろう。もしもイングランドの非農業人口が全部一つの都市に住んでいるとすれば、その時には、彼らを多数の都市に分散させるだけで、生産物を市場に運搬したり肥料を獲得するための総費用は大幅に減少し、その差額のすべてが、いくつかの都市が建設された近隣の土地の所有者たちの間で分割されるに違いない。このような仮想の事態は、優れた立地の影響を説明するのに役に立つ。相当立派な国では、他のいくつかの国における比較的広い地域に比べれば、すべての地域が都市にずっと近いかもしれない。多くの国々では比較的広い地域が、オランダのどの地域に比べても都市からずっと遠く離れている。国土全体が一定の立地の優位性をもっているオランダは、領土の割にずっと大きな富と人口とを誇っているが、それは果たして何のおかげだろうか。それは、国民の普通の食糧を育成するのに収穫をますます減減させながら資本を充用する必要がないおかげであり、国民の普通の食糧をオランダよりも比較的小さい費用をもって育成しうる国々から輸入しているおかげである。このことが、イングランドの地主たちにとっての一つの教訓である。

リカードウ氏と彼の追隨者たちは、立地の影響に十分な注意を払うことがなかつたために、不思議な誤りに陥ってしまった。

リカードウ氏は言う。「豊饒で肥沃な土地が豊

富に存在し、現状の人民を扶養するためにはそうした土地のほんの僅かな部分を耕作する必要があるに過ぎない…ような国に最初に定住する際には、地代は存在しないだろう。というのは、豊富な分量の土地がいまだ占有されておらず、従ってそれを耕作しようと思った者ならば誰でも自由に使用できる場合には、土地の使用に対して支払う者など一人もいないに違いないからである」²¹。

ミル氏は言う。「土地が何も生産しないのであれば、その土地は占有する値打ちがない。耕作のためには第一等地の一部分だけが必要であるに過ぎないのであれば、耕作されない土地は一切何もたらさず、つまり価値を有するものなどびた一文もたらさない。したがって、そうした土地は、当然のことながら占有されないままであって、その土地を生産的なものにしようと企てる者ならば誰でもそれを所有することができるのである。正確に言えば、こうした時期にある間は、土地は地代を一切もたらさない」²²。

マクアロック教授は言う。「どこであれ、まだ占有されていない広大な土地に恵まれた国に最初に定住するに際しては、どのような地代も決して支払われないが、それは、無限の量を無償で獲得しうるものに対しては誰であれ地代など決して支払わないだろう、という明白な理由のためである。かくして、誰も占有していない土地が十分に提供されているニュー・ホランドにおいては、最良の土地が耕作されてしまうまでは、地代の存在など聞こえてはこないだろう。社会の初期の段階で、最良の土地だけが耕作されている場合には、地代など誰も知らない。* どのような国であれ、発展のずっと初期の段階では、良質の土壤の中でも最高の土地以外は耕作されず、その結果、一定量の労働によって最大量の食糧が獲得される

場合には、地代など決して支払われない**」。

* 『経済学原理』²³

** マクアロック版『国富論』の序論

ここに、地代についての事実と理由とがある。事実についての叙述は、あらゆる経験からの反論に会っている。果てしなく広がる最高に肥沃な土地がまだ耕作されないままに存在するような国々のなかでも、ある土地には、また、利潤を目論んで耕作に向けられている土地にすら、極めて高い地代が支払われている。ニューヨークおよび北アメリカにおける大都市の多くでは、地所の地代は、恐らくリヴァプールやロンドンと同じぐらいに高い。こうした諸都市の近隣における土地は、果物や牛乳や料理用野菜といった遠距離の輸送には耐えることができないと思われる生産物を都市の住民に供給するために利用されているが、このような「便益地」²⁴と呼ばれる土地は、イングランドにおけると同様に、アメリカにおいても高い地代を生み出している。また、アメリカにおいては、国民の普段の食糧を栽培するために使用されている土地でも、都市に近いか、土地に通じる整備された道路に近ければ地代を生むが、同じ目的に使用されていても、都市から遠く離れている土地の場合には、びた一文の地代も生まない。土地は、生産物を市場まで運搬する際に発生する二つの費用の差額を地代として生み出すのであり、この差額は、整備された道路がないので、ほとんどの土地の生産物を高額の輸送費用を支払わなくては市場まで運搬できないような諸国においては、著しく大きなものである*。「比較的生産性の高い資本部分に対して与えられた報酬と、生産性が最も低い資本部分に対して与えられた報酬との差

²¹ Ricardo, *Principles*, p.69. 邦訳81頁。引用の最初の文のなかで、リカードの原文にある、「あるいは実際にその人民が自由にしうる資本をもって耕作することのできるのはこうしたほんの僅かな部分であるに過ぎないような」という叙述が省略されている。強調はウェイクフィールド。

²² Mill, J., *Elements of Political Economy*, op.cit., p.31, 邦訳26頁。強調はウェイクフィールド。

²³ 引用文の途中までは、マクアロック『経済学原理』のなかにある叙述 (McCulloch, J. R., *The Principles of Political Economy*, 1825, 4th ed.1849. in *The Collected Works of J. R. McCulloch*, vol.2, Routledge, 1995, p.485)。強調はウェイクフィールド。ただし第4版では、文章がかなり変えられている。

²⁴ 原語は、「accommodation-land」。

額」が、常に借地人によって地主に支払われるとは限らない。というのは、アメリカでは、土地は、その土地を所有している者によって耕作されるのが極めて普通だからである。しかし、土地の所有者でもある耕作者によって支払われるにせよ、あるいは耕作者でもある地主によって留保されるにせよ、こうした差額が実際に地代を構成している。アメリカや、いまでも無限に広がる未耕作地を抱える諸国では、こうした差額が立地についての格差からもたらされている。こうした諸国では地代が優れた自然の肥沃さのために支払われることは決してない、というのは正しい。というのも、マクアロック教授が「限りない量を無償で獲得しうるものに対しては、誰であれ地代など決して支払わないだろう」と言うように、その理由は明白だからである。しかし、市場を巡る立地の上で優れている土地が無限に存在することは決してありえず、そうした土地はどうしても量が限られている。リカードウ氏やミル氏のような慧眼の観察者がこの極めて明白な区別を看過してしまったことには、驚くより他にない。この点についての彼らの過誤は、より少なくなる報酬をもって資本を充用する必要を除くその他すべての地代の原因を拒絶するという、リカードウ理論における第二の否定的な見解の礎石をなしている**。礎石が取り除かれれば、上部の建築物は崩れ去る。

* 最高に肥沃な土地が無限の量で存在する諸国にも優れた価値をもつ土地があるということについてのいくつかの決定的な証拠は、植民地という問題を論じるなかで示そうと思う。

** 最高に肥沃な土地が無限の量で存在する諸国における地代の原因については、植民地という問題を扱う際に、もっと完全に言及しようと思う。

立地という問題の下で私たちが検討せねばならないのは、便宜地と呼ばれるものに対して支払われる地代の性質と原因である。

あらゆる都市の近郊には、耕作に利用されると

はいえ、諸商品を市場まで運搬する際の二つの費用の差額よりももっと高い地代を生み出す土地がある。都市の住民が必要とする多くのものは、その都市の近隣における土地を利用しないことには供給できない。例えば、牛乳や多くの果実や調理用の野菜は、長距離の運搬には耐ええないであろう。これらは、その都市から相当に離れた土地で栽培されれば、市場に運ばれる途中で腐ってしまうに違いない。こうしたものは、もしも都市の住民がそれらをすべて購入してくれるのであれば、それほど離れてはいない土地からもたらされるはずである。さらにまた、もしも都市の住民が自分の家族が利用するために牛を飼いたいと望むのであれば、あるいは、都市の比較的裕福な住民であればごく普通に起こるように、自分の馬を飼育するための土地が欲しいと望むならば、それほど大きな町でないとして、こうした人々は自分の住居に近い土地を手に入れなければならない。彼らは、都市市場向けの野菜栽培業者や酪農業者と同じように、その土地からこの都市まで輸送する際の二つの費用の差額など、ほとんど顧みることはない。こうした人々が手に入れる自分の目的に役立つはずの土地はそこにしかなく、そこでなければ手に入れようとは全く思わないに違いない。従って、こうした人々がこのような土地の使用に対して支払うものは、需要と供給との比率に完全に依存するだろう。

しかし、別の土地では役に立たない目的のために提供される土地の供給は、その土地が一定の条件をもっているために、常に同じであるに違いない。そうすると、供給と需要との比率は、需要の量に依存するはずである。もちろん需要は、都市の規模と都市住民の富とに比例するであろう。従って、小規模で貧しい都市の周囲にある便宜地は、大きくて豊かな都市の周囲の便宜地よりも比較的低い地代を生み出すことが判る。都市の規模が大きく豊かであればあるほど、その近郊に対して支払われる便宜地地代²⁵はますます高いだろう

²⁵ 原語は、「accommodation-rent」。

し、住民が便宜地に十分に支払いうるだけ豊かな都市が多ければ多いほど、便宜地地代の総額はますます大きいだろう。この種の地代を地方および全国で増大させるための唯一の手段は、豊かな都市の人口を増加させることである。私たちはやがて、この原因が最も大きな効果を発揮するよう作用するのは果たしてどのような事情の下においてなのかを、また、さらに言及すべく残されている別のもう一種類の地代を増加させるのは果たしてどうであるのかを知ることになる。

前に見たように、常に取得される最高の地代は生産物の姿では何も生み出さない土地に対して払われている。土地を耕作する階層が耕作のために必要とする他にも、社会の様々な階層はすべて、計り知れないほど様々な目的のために土地を必要とする。事業を営み世間の楽しみを味わうためには、家屋、倉庫、工場、公共の建物、船渠、埠頭、市場、運河、道路、劇場、遊園地などがなくてはならない。こうした目的や、あるいは類似の目的のために土地が必要とされる場合、その土地がどこにあらうと、またそれが私的な個人によって必要とされようと、公共のために必要とされようと、その土地は、かつて便宜地につけられた最高の価格あるいは地代をさらに超えるほどの価格をつけられ、あるいはそうした地代をもって貸し出される。このような土地に対するその地域の需要がどれだけのものであれ、供給は常に一定のはずであり、従って、価格や地代は需要に依存する。こうした土地に対するその地域の需要には、この土地が必要とされる目的や、この目的を別の場所で達成することの困難さあるいは不可能さや、またこの目的が役に立つ人々の階層の富裕さなどに応じて、いくつかの程度の強度がある。しかし、こうしたそれほど重要ではない違いにこだわらなければ、耕作に充用されない土地に対する需要は、地域的にも全国的にも、便宜地に対する需要

と同様に、都市人口の大きさと豊かさとに依存する。このような判り切ったことを述べるのは、ただ、次に何が起こるかを知るためである。

チャーマーズ博士は言う。「私たちが自由に使える人民の諸労役を支配しうるのは、まさに、直接労働者と二次的な労働者²⁶の食糧よりも多くの剰余生産物を生み出す肥沃な大地のおかげであり、こうした自由に使える人民は、自らを扶養してもらい見返りとして、この剰余価値の所有者たちのより高級な快樂とより優雅な生活とに奉仕するのである。社会が、野生の動物の粗末で僅かな必要物よりももっと多くの供給を受けているのは、まさにこの剰余価値のおかげである。この剰余は、技芸、科学、文明、贅沢、法律それに国防、つまりはこの国家を強力にし、この国家に優雅さを添えるあらゆるものための経費が支払われる本源的な基金である。この剰余がなければ、私たちは、農耕者と国中の村落に散らばって人民全体にその [二次的な] 労役を提供するはずの家内ので素朴な少数の職人たちからなる農村人口だけしか持てなかったであろう。私たちがこの剰余に避け難く負っているのは、わが国の人口稠密な都市であり、社会に快樂と優雅さをもたらすための何千という製造工場であり、広範多岐に分かれた商業であり、国防のための軍隊であり、教育のための学校や大学であり、立法と司法とのための殿堂であり、そして、教会や寺院で祭事を行うための祭壇までもがそうなのである…」²⁷。便宜地や建物敷地の高い地代は、別の土地の剰余生産物から、つまり農業者の利潤*や地主の地代から、租税や売買という手段を通して、一部は直接的に一部は間接的に支払われる。イングランドにおける都市人口の数と富とは、農業における剰余生産物が累進的に増加することによって増進した。わが国における自由に使える人民の膨大な数は、全人口に対する比率でいえばフランスの二倍であり、

²⁶ チャーマーズのいう二次的な労働人口とは、食糧以外の「生活のための便宜品、つまり二次的な生活必需品」を生産する人口部分である (Chalmers, T., *An Enquiry into the Extent and Stability of National Resources*, 1808, p.6)。

²⁷ Chalmers, Thomas, *On Political Economy in Connexion with the Moral State and Moral Prospects of Society*, 1832, Rep. by Augustus M. Kelly, 1968, pp.45-6。ウェイクフィールドが省略している言葉を [] で補った。強調はウェイクフィールドのもの。

また、彼らは主に都市に住んでいるのであるが、こうした膨大な数の人民は、労働の剰余生産物を増加させる農業の改良によって生み出されてきた。私たちは、先の戦争の間に起こった農業の大規模な改良とその結果である都市人口の拡大とが、どのような原因で起こり、どのような結果をもたらしたかを見てきた。わが国土における自然の肥沃さに奇跡的な改良が行われたとすれば、同じ結果がもたらされたに違いない。私たちは、わが国土の自然の肥沃さを改善することはできないし、わが国の国土のように高水準の耕作が行われている国では、国民の普段の食糧を育成する技術が大幅に改良されることも恐らくはない。しかし私たちは、国民の普段の食糧を、わが国土よりも自然の肥沃さがずっと優れた土地に頼ることはできよう。このような方法によって、わが国の土地所有者たちは二重の利得をえるに違いない。第一に地主たちは、通常食糧が安価になれば、以前に指摘した利益を、すなわち、普段の食糧以外のあらゆる産物を育成するために充用された資本の生産物からより大きな剰余としての地代を手に入れるはずである。第二に地主たちは、限界などは誰も設けることができないほどの強さで居住用の土地や建物用の土地を欲求するような、わが国都市人口の増加を手に入れるに違いない。遠く離れた多くの土地で農業によって養われている人民全体のなかでも、チャーマーズ博士が自由に使えると呼んだ部分は都市に居住するはずであり、この部分は、こうした最高の地代の原因となるような種類の需要を、彼等の数が増加する割合よりももっと大きく、また多かれ少なかれあらゆる方向で拡大するであろう。こうした一般的な推論は、極めて重要である。他国に比べて優れた無限の製造力をもっているとともに、生産性を低下させつつ資本を充用する以外には普段の食糧の量をさらに増加させることができない国では、あらゆる種類の地代のなかで最も効率の高い地代の原因は、製造した財と交換することによって、獲得できる場所ならどこからでも、最も安価な普段の食糧を輸入することである。

*これは、私たちの経済学のイロハが欠陥を孕んでいることの一つの例である。私たちには、地代を構成する剰余生産物と、資本の回収部分を越える剰余生産物全体とを区別するための言葉が必要である。

価格と地代との関係という問題が、考察すべく残されている。

劣等な土壤に頼らねばならないか、さもなければ収穫を減減させつつより多くの資本を充用せねばならないことから地代が上昇する場合には、すなわちこれらを通じて地代が増加する場合には、価格の上昇が起こらねばならない。需要は増加した。しかし供給は、新たな量を獲得するためにより大きな費用をかける以外には増加させることができない。新しく生産された量は、もしもそれが古い価格で売られたならば、その生産のために充用された資本を通常のプロットをもって回収することができないはずである。したがって価格は、古い生産費と新しい生産費との差額に比例して上昇する。しかし、あらゆる生産物がこのより高い価格で販売されるのであるから、資本のうちのより生産的な部分は、今では、古い生産物の量よりも少ない量を販売することで通常のプロットを回収することができる。それゆえ、以前には何も生み出さなかった資本から、剰余が、従って地代が生み出される。これがリカードの原理である。この必然性の原理に従って地代が生じたりあるいは増加する場合にはいつでも、より大きな費用で生産された商品の価格には上昇が見られる。より高い地代はより高い価格を伴う。しかし、価格の原因も地代の原因も双方とも、古い費用では充たすことができないはずの新たな需要であるように思われる。

新たな需要がもしも古い費用をもって充たされたならば、価格は上昇しないに違いない。新たな需要は恐らく、農業技術の改善によって充たすことができるだろう。資本当りの古い収穫量は、それが古い価格で販売されれば、利潤を伴って資本を回収する。しかし収穫量は今ではより大きくなっている。価格は同じであるが、しかしより多

くのもが売られる。それゆえに、以前には何も生み出さなかった資本から剰余が、従って地代が生み出される。ここに、価格の上昇を一切伴わない、新たな地代が存在する。

いやむしろ地代は、その増加が改善からもたらされる場合には、価格の低下を伴って増加しうる。新たな需要と新たな供給とを考えよう。供給がもしも資本当りの収穫を増加させるような手段によって提供されるとすれば、そしてそこで、新しい生産物の量がこの新しい需要を若干超過するとすれば、価格は低下する。しかし、この価格が利益とともに資本を回収するためには資本当りの新しい収穫量を全部販売しなければならないところまで低下する場合を除けば、こうした目的のために販売する必要のない収穫部分はすべて剰余あるいは地代の増加となる。資本当り収穫量の増加が価格の低下相当分よりも大きい場合にはいつでも、つまり、生産費の増加に見合う程度まで価格が大きく低下しない場合にはいつでも、地代は価格の低下をともなうことなく増加する。

価格が低下するにつれて地代が上昇するようなもう一つ別の場合が存在する。

ある国民が等しい額を、まずは普段の食糧の購買に支出し、次にその他の土地生産物の購買に支出すると想定し、また、彼らの土地の半分は普段の食糧の育成に充用され、残りの半分はその他の生産物の育成に充用されていると想定しよう。こうした実情であるところに、いま、普段の食糧はすべて半分の価格で海外から獲得されるとする。そうすると、普段の食糧には、支出額全体の半分ではなく、僅かに四分の一が支出されるはずである。あとの四分の三は、その他の生産物に支出されるべく残っている。その他の生産物に対する需要は二分の一だけ増加したのに、その他の生産物を育成するための土地の量は二倍になったので、つまり、その他の生産物に対する新しい需要は僅か二分の一しか増加しなかったのに、その他の生産物の新たな供給は二倍になったので、その他の生産物の価格は四分の一だけ、つまり25パーセントだけ低下するだろう。しかし、その他の生産物

の価格が25パーセント低下したのに、普段の食糧の価格は、それゆえその他の生産物の生産費は50パーセント低下した。この差額は剰余すなわち地代を形成する。この場合には、普段の食糧とその他の生産物との双方における価格の低下をともなって、地代は上昇するに違いない。

しかし、普段の食糧が間違いなく安ければ、この国の人口と富とは増加するはずである。そこで、そのうちには、その他の生産物に対する需要が、普段の食糧とその他の生産物とを合わせた以前の需要に等しくなるであろう。そうすれば、その他の生産物の価格は以前の高さにまで上昇するはずである。しかし、普段の食糧の価格は上昇しないだろうから、その他の生産物の生産費は以前の生産費よりもなお50パーセント低いはずである。こうして地主たちは、国民の普段の食糧に起こる価格低下の利益のすべてを刈り取るに違いない。

地主たちの利得は、恐らくこの点に止まらないだろう。もしも、ここに想定されている国民が普段の食糧を自ら製造した財をもって他国から購入する方に限界がないとすれば、そしてもしも、低い価格で普段の食糧の供給を受けることに限界がないとすれば*、その場合には富と人口とが、普段の食糧ではなく、その他の生産物に対する需要が普段の食糧とその他の生産物とを合わせた以前の需要を超えるに到るまで、富と人口とは増加し続けるに違いない。そうすれば、その他の生産物の価格は、かつての価格以上に上昇するはずであり、そしてこの価格の上昇はすべて地主たちに帰属するに違いない。この利益は、それは普段の食糧価格の低下という手段によって獲得された利益であるとはいえ、リカードウ理論的な地代と呼ぶことができる。この新たな地代が生じたのは、なるほど国民の普段の食糧を育成する際にはなく、ここで想定した国の大地で生産されるその他のあらゆる生産物を育成する際にはあるが、しかし、新たな需要に対応するために逡減する収穫をもって資本を充用する必要によってである。

*私は、穀物法の問題を扱う際に、この国が海外諸国から獲得しうるはずの安価な穀物の供給にはほぼ確実に限界があることを詳細に究明しようと思うし、また、植民地の問題を扱う際には、そうした供給が、限界をなんら設けられることなく、どれほど増加しうるかを努めて示すつもりである。

多くの場合地主は、生産物のうちで利潤とともに資本を回収する部分を超えて剰余をなすあらゆる部分の他にも、地代という名のもとに、建物に対する支払いや、有害な植物を駆除したり、排水を行ったり、柵を張ったり、灌漑のための水路や家畜のための人工池を作ったり、等々といったその他の改良に対する支払いを受け取る。アダム・スミスは、こうした人工的な特性の価値は、土地という自然の特性すなわちリカード氏が「本源的で不滅の諸力」と呼んでいる²⁸特性と同じ法則によって規制されると考えた。スミスは、ことにリカード理論の甚だ猛烈な提唱者たちによって、本来異なる二つのものを混同しているとして非難されてきた。彼らは、自然の特性に対する支払いは地代であるが、人工的な特性に対する支払いはこうした特性を生み出した資本に対する報酬、すなわち利潤あるいは利子であるという。この問題については、リカード氏（現行版の188頁）とミル氏（207頁）とは、マクアロック教授が次の叙述のなかで表明したものと同意意見である。

「厳密に言えば、土地の地代は、土壤に元来自然に備わっている力の使用に対して借地人が地主に支払う額であり、それは、農場に大抵は建てられている建物の使用やあるいは恐らく農場において効力を発揮しているあらゆる改良などに対して借地人が支払う額とは全く異なるものである。後者は、こうした建物や改良に支出された資本の利潤であり、あるいはそれに対する報酬である。こうした二つの額は、スミス博士がこの事例の中で混同しているように、地代という一般的な名前の下に通常は混同されている。しかし、これらは本

来違ったものであり、この種の研究においては常に、このように考えられねばならない」*。

*マクアロック編『国富論』に付けられた脚注（第一編、239頁）。

マクアロック教授はアダム・スミスとこのように大きく隔たっているのであるが、この問題は極めて重要なものである。進歩した国では、耕作に使用される土地に対して支払われるものの極めて大きな割合が、資本の支出によってもたらされた特性に対する支払いからなっている。この国の土地がすべて自然の状態に戻されたと想定してみよう。すなわち、どのような種類の農業用建築物もなく、柵もなく、排水設備もなく、こちらは深い森に覆われ、あちらはエニシダやイバラに覆われ、また他の場所はアシヤイグサあるいは淀んだ水に覆われていると想定してみよう。そして、こうした状況をすべて現在の状態に転換する費用を見積もり、支出された費用の5パーセントあるいは僅か2パーセントを利潤や利子だと認め、その額を耕作に使用されている土地に対して支払われている現行の地代から控除する。そうすれば、「土壤の自然で本来備わっている力」に対する支払いとしていったいどれだけが残るだろうか。それが地代全体の僅かな部分をなすほど小さなものであるに過ぎないことは、誰もが認めるだろう。しかしながら、もしもマクアロック教授が正しいとするならば、あらゆる進歩した国において地代を規制する諸法則は、総地代のうちの、まったく小さくて取るに足りないほど僅かな部分に影響を及ぼすだけであろう。彼は完全に間違っていると、私は考えざるをえない。

様々な国においては、普段の食糧を栽培するために使用されて高い地代を生み出している土地のなかには、資本を支出して海を干拓したものもある。こうした土地が元来もっていた自然の特性は、一日に二回、塩水に覆われるというものであっ

²⁸ Ricardo, *Principles*, p.67. 「地代は、大地の生産物中の、土地の本源的で不滅の力に対して地主に支払われる部分である」。

た。現在この土地がもっている肥沃さは全く人工的なものであり、塩水を取り除く壁や堤防を築くために資本を支出することによって生み出されたものである。思うに、この土地の若干の部分が生み出す地代は、現在の特性をこの土地に与えるために支出された資本に等しい。この土地の地代は、イングランドにおける別の土地の地代と同様に、近年、大幅に上昇した。しかし地代が上昇している一方で、利潤率や利子率は低下してきた。そうすると、この場合については、一般的法則からの例外なのだろうか。この土地に肥沃な特性をすべて与えるために資本を支出した人々やその後継者たちは、普通の利子率が4パーセント以下であるのに、恐らくは100パーセントにも上る利潤率あるいは利子率を獲得しているというのだろうか。この疑問が求めているのは別の答えであり、すなわち、この土地に対する地代も、その特性のすべてが資本の支出によってもたらされたものではない別の土地の地代と同じ法則によって規制されてきたことは明らかである、というものとは違った答えである。

ミル氏が事例として取り上げたような²⁹、大地から天然の森林を除去する際に資本を支出するという場合には、つまりこの資本の支出がなければ土地は少しの程度の肥沃さをも持ち合わせなかったはずである場合には、それ以降に生じる地代はすべて、そもそもの資本の支出に対する利潤あるいは利子と考えられるべきであろうか。明らかにそうではない。というのも、この土地の地代は、利潤や利子を規制する諸法則に従うのではなく、地代を規制する諸法則に従って上昇するであろうし、上昇した後は低下するだろうからである。労働によってもたらされた特性が、価値の上で、自然の特性とまったく同じ様に上昇したり低下したりすることは、どのような場合であれ一目瞭然

であるように思われる。

しかし、こう言われるかもしれない。すなわち、人工的な特性と自然の特性との間には大きな相違があるのであり、というのも、土壤の自然の力が「不滅」であるのに対して、農場用の建物、排水、柵、水路および防潮堤は、新たな資本の支出によって時折更新されなければならないからであると。答えはこうである。すなわち、土壤は不滅の力など決してもたない。つまり、土壤の自然の力は、連作で土地を痩せさせれば恐らくは破壊されるし、全部とは言わないまでも一部の耕作者が我慢することによって、すなわち、耕作者が土地を責め立てて得られるだけのものを一杯生産するようなことを決して行わないことで保全されなければならない。耕作者には通常、賃貸借契約かあるいは慣習によって、連作を控えて土地を疲弊させないようにする義務があり、もしも土地の特性を劣化するままに任せておいたならば、この者は、数年の間、その土地に対してもっと多くの額を支払わねばならないはずである。つまり、もしも耕作者が連作によって土地を疲弊するままにしていたとすれば、この者がこの土地の自然の特性を元に戻すためには、土地を連作で疲弊させる許しを得るために支払った異常な額の地代を上回るほどの肥料を施さなくてはならないか、あるいは土地の肥沃度を回復させるために休耕している間の地代という損失を被らなくてはならない。すなわち、地主が農場の自然の特性を保つために我慢するものは、あるいは、もしも我慢しなかったとすれば地主が農場の自然の特性を回復させるために費やさなければならなかったものは、彼がこの農場の人工的な特性を保つために時として支出するものとまったく同じ性格のものである。従って、地代に関する限りでは、人工的な特性と自然の特性との間にはどのような区別もないのである。

²⁹ 先にウェイクフィールドが引用したJ.ミルの地代論で、ミルは「耕作されている土地と、耕作用としてはまだ開墾されていない土地との間には、疑いもなく違いがある。人は、新しい土地を開墾するよりはむしろ、開墾の費用に対して、年々、あるいはその他の場合もあろうが、等価を支払うだろうし、彼がそれ以上のものを支払わないことも明らかである。したがって、この支払いは土壤の力に対するものではなく、単に、土壤に投下された資本に対する支払いであるに過ぎない。この支払いは地代ではなく、利子である」と述べていた。

³⁰ 原語は「moveable capital」。

とはいえ、資本の支出によってもたらされた特性と、耕作に用いられた可動資本³⁰の間には大きな違いがある。前者は土壌の自然の特性と永久に結合して溶け込み合うから、その価値は自然の特性の価値を規制するのと同じ事情に従うようになる。これに対して、後者は、他のあらゆる可動資本の性質と共通しており、利潤率を決定する諸

事情に従うのである。従って、アダム・スミスは本来同じであるこれらの事に当然ながら困惑したのであるが、マクアロック教授はこれらの事を分離しているだけでなく、本来異なっている事を混同しているのである。

(続く)